

## 『人生地理学』補注」補遺（第4回）

斎藤 正二

### 解題

前号に引き続き、思想史家・斎藤正二の畢生の大事業と言うべき『牧口常三郎全集第2巻 人生地理学（下）』『補注』の未公刊部分を〈補遺〉として掲載する。遺稿の掲載を御許可下さった斎藤氏の御遺族にはこの場を借りて胸奥より深く感謝を申し上げる次第である。

本号では、「第二編 地人相関の媒介としての自然／第十九章 気候」の〈補注26〉から〈補注57〉までの原稿のなかから、斎藤がほぼ完成させていたものを番号順に掲載する。一覧にすると以下の通りである。

- 補注 27 海流の原因（六一ページ、注13）
- 補注 35 すでに无常の風……（六五ページ、注13）
- 補注 36 蓮如上人兼寿（六五ページ、注14）
- 補注 37 「御文章」（六五ページ、注15）
- 補注 39 晴雨計（六六ページ、注1）
- 補注 40 風は先づ其速度によりて左の七種に区別せらる……（六六ページ、注3）
- 補注 52 雪ふれば冬こもり……（七九ページ、注6）
- 補注 53 松柏の緑色に映じ……（七九ページ、注7）
- 補注 55 文禄の役（八二ページ、注22）

なお、以下の補注については原稿が存在せず、今号では収録していない。

- 補注 26 風力は……湖沼を穿ち、海岸に砂丘を作る等（六〇ページ、注10）
- 補注 28 中、後の稲花の盛り（六二ページ、注18）
- 補注 29 世に神風と称せらるゝ（六二ページ、注5）
- 補注 30 「松風瑟瑟……」（六三ページ、注9）
- 補注 31 「磬韻似煙……」（六三ページ、注10）
- 補注 32 楊柳（六三ページ、注13）
- 補注 33 「浜の好い風ゴート吹け」（六四ページ、注5）
- 補注 34 「無情の風にさそはれて」「明日ありと思ふ……」（六五ページ、注11・注12）
- 補注 38 気象学上之を以て一気圧となす（六五ページ、注18）

- 補注 41 半年風又は季候風（六九ページ、注8）  
補注 42 飽和点 飽和状態 飽和の度（七二ページ、注4・注5・注6）  
補注 43 此意味に基く空氣の湿度は……（七二ページ、注1）  
補注 44 雲 霧 霞（七四ページ、注15・注16・注17）  
補注 45 靄或は「ガス」の称あり（七四ページ、注18）  
補注 46 雲は其形状によりて、左の四種に大別せらる（七四ページ、注1）  
補注 47 いにしへの人のうゑけん……（七五ページ、注3）  
補注 48 雲かゝるとは山松は……（七五ページ、注5）  
補注 49 英國の天氣は多くは斯くの如くなれば英人は……所以なからんか（七五ページ、注7）  
補注 50 過度の繁茂を促がし、人類の勢力を圧倒せしむ……（七八ページ、注6）  
補注 51 結晶（七九ページ、注1）  
補注 54 那威政府の鋭意なる政策（八〇ページ、注14）  
補注 56 ナポレオンの英邁を……」（八二ページ、注1）  
補注 57 氣層の安全なる状態（八二ページ、注4）

第十九章に関する補注の情報はこれですべてである（第二十章以降の補注については、機会を改めて掲載したいと考えている）。

今回とくに付記しておきたいのは、斎藤が文献を引用する際に触れている当該文献中の図版も併せて収録したことである。これは当該図版が、斎藤の補注を理解する上で不可欠であると考えられるためである。収録した図版の出典は以下の通りである。

- ・宇田道隆『海』岩波新書、1969年（新版〈青版〉）→補注27
- ・中川源三郎『天気予報論』裳華書房、1900年→補注39、40
- ・和達清夫監修『増補・気象の事典』東京堂、1964年→補注39
- ・吉野正敏他編『気候学・気象学辞典』二宮書店、1985年→補注39

前号解題でも記したが、斎藤の『人生地理学』注釈の特徴は、①現在の自然科学研究の成果も逐一参照しつつ『人生地理学』の記述との照合作業を行っていること、②牧口の用いている一語一語を『人生地理学』執筆当時（明治中期）の思想学術的・政治社会的コンテクストにそのつど丁寧に位置づけていること。③しかも、この作業を単なる事実確認で終わらせるのではなく、そこに浮かび上がってくる若き牧口の思考様式を正確に掴み取り、さらには後期の『創価教育学体系』（価値論）の思想的萌芽をも鋭く読み取っていること——以上の3点にまとめることができる。これらの特徴は今号掲載分においても遺憾なく発揮されている。渾身の注釈文をなにとぞ御味読頂きたい。

なお、編集に際し、岩木勇作氏（創価大学大学院博士後期課程）に協力を頂いた。

（伊藤貴雄 記）

## 凡例

・表記は基本的に第三文明社刊『牧口常三郎全集第二巻 人生地理学（下）』の補注に準拠する。たとえば、「1 社会てふ語（一九三ページ、注1）」は、同書193ページに見える「社会てふ語」

に付された〈脚注1〉のための〈補注1〉を意味する。

・原稿は縦書きだがそれを横書きに直した。それ以外は原稿の指示を極力反映してある。文中の引用形式は『全集』補注に準拠し、引用原典（縦書き）の右・左傍線は下線に統一した。

・字体は新字に統一してある。旧仮名遣いはそのままとした。

・おどり字の表記は次のように改めた。くの字点は「々々」あるいは「ゝゝ」にした。漢字は「々」、かなは「ゝ」「ゞ」、カナは「ゝ」「ゞ」で統一している。

・明治時代まで慣用された「と」「井」「子」「𛄁」などの仮名表記は「こと」「ゐ」「ね」「とき」などに改めた。変体仮名（「𛄁」など）は現代仮名遣いに改めた。（編集部）

## 補 注

## 第二篇 地人相関の媒介としての自然

### 第十九章 気候

27 海流の原因（六一ページ、注13） ここの補注は、牧口原著上欄に摘出＝揭示された当該小見出し、のもとに記述された文章全体に関する補説注解、すなわち当該段落十行ほどの本文全部に関するそれということになる。内容的には、特に段落終わり近くに見える「是れ實に海流の因と風向の因との一致せるを明瞭に説明せるものにして海流の主因が風力にありとの学説の學者に信ぜらるゝ所以のものなり。」というセンテンスに関する今日的解釈および評価ということになる。一九〇三年刊『人生地理学』が提示し説明した「海流の主因が風力にありとの学説」は、こんにちとても、概括的には正しさを失っていないということ、ただし、現在ではそれのみにてはすべてを説明し得なくなっているということ、この二つのことを明らかにしたいのである。

繰り返しになるかも知れないが、やはり、あらかじめ、「海流」そのものの最新概念ないし術語説明を確かなものにしておく必要があるであろう。この語について、校注者の手許にある幾つかの地理学関係辞典を比較勘考した結果、いちばん秀れているのは日本地誌研究所編『地理学辞典・増補版』（一九八一年七月、二宮書店刊）所載記事であるようにおもわれた。仍って、同辞典に典拠を求め、引用しておく。――

海 流 (E) ocean current (F) courant marin (G) Meeresströmung, Meeresstrom 海のなかの海水の定常的（速度と流向）な帯状の流れ。潮流では半日または一日ごとに流速と流向とが変化するのに比べ、海流は遥かに定常的な海のなかの細長い流れである。海流の特に速いもの（黒潮・メキシコ湾海流・モザンビーク海流など）では4ノット（2m/sec.）以上に達するものもあるが、多くは1ノット程度とみられている。海流の厚さは、同じ海流でも場所によってかなりの違いがある。たとえば黒潮では、台湾沖で約400m、沖縄付近で600m、紀伊半島沖で700m位と見積もられている。海流の幅は広くて200km程度で、海洋の広さと深さに比べれば、その表層の狭い部分が流れているに過ぎな

い。

海流の原因としては、吹送流・傾斜流・密度流・補流などが考えられてきた。吹送流は卓越風による応力が、海面を通して海水に伝達されて起こる流れである。中緯度の偏西風系と低緯度の貿易風系とに対応して、北半球では時計回り、南半球では反時計回りの海水の水平大循環がみられることから、海流の原因を洋上の卓越風による吹送流に求める試みは古くからあった。しかし、4ノットにも達する海流の流速を、吹送流からだけで説明することは不可能で、他にいくつかの原因が複合しているものとされた。海水が風によってある方向へ吹き送られると、海岸近くでは海水が堆積して海面が傾斜し、そのために生ずる海水中の圧力分布に基づく海水の流れが傾斜流である。海水中の圧力分布の不均衡は、密度の異なる水塊が接した場合にも起こる。この密度差を原因とする海水の流れを密度流という。また、ある場所の海水が、いろいろな原因で他へ移動すると、水の連続性の原理により、これを補うように海水の流れが起こる。これを補流という。補流には水平方向のみでなく、鉛直方向の流速成分が大きい場合がある。

このように、海流にはいろいろな原因が考えられてきたが、第2次世界大戦後の研究によって、大洋にみられる海流系は、卓越風による吹送流がその起因であって、これに大陸の存在とコリオリの力が加わって、海流は大洋の西岸で強化されることが説明された。これに対して、他の原因は部分的に重要であるに過ぎない。現実の海流は、カリフォルニア海流・フンボルト海流などは補流、赤道反流は傾斜流の性質を帯びている。また、黒潮が台湾付近から日本南海域へかけて増勢するのは、その大陸側に接する低密度の水塊との間の密度流に起因すると考えられたこともあったが、現在では黒潮の流動の結果として、密度の異なる水塊が接していると考えられている。この他に、深海における流れも次第に明らかにされつつある。

（井口正男）

最も新しく最も詳細なる二宮書店版辞典に依拠して再検討してみても、どうやら、「海流の主因が風力にありとの学説」は正しさを失うことは無さそうである。尤も、現在では「風力」といった大掴みな把えかたをせずに、厳密精細なる概念である「吹送流」という術語を用いるようになっているが。さいわい、同一執筆者による記述が当該<sup>見出し語</sup>のもとに登載されているので、その知識をもっておこう。「吹送流（E）drift current（F）courant de vent（G）Triftströmung 水面上を吹く風の運動のエネルギーの一部が、水体に伝達されることによって起こる水の流れ・水面上の風速の鉛直傾度と、ある風速以上で生ずる水面の凹凸（波）とに関連して、まず水面にある水が風下への運動を起こす。この運動は次第により下層の水へと伝わり、ついにある厚さの流れが生ずる。風向が長時間一定していると、安定した水の流れが発達する。この際、表層の水の流向は、風下方向に対して北半球では右に、南半球では左に偏し、流速は風速の2～4%程度であると考えられている。最も大規模な吹送流は、一定の風向の風が卓越する大洋にみられる。低緯度の海域では、貿易風によって起こると考えられる北赤道海流と南赤道海流、中緯度の海域では偏西風に吹き送られると考えられる西風皮流が発達し、これらの海流は大洋の西岸と東岸に沿ってほぼ連結し、海水の水平の大循環を形成している。大洋の東岸に沿う連結部分の海流は、補流の性質を帯びるが、西岸に沿って発達する太平洋の黒潮（北半球）、大西洋の湾流（北半球）、インド洋のアグリアス（ベンゲラ）海流（南半球）などの優勢な海流は、転向した北赤道海流または南赤道海流が、大陸の存在とコリオリの力によって強化されたものといわれている。高緯度の海域にみられる極流も、偏東風による吹送流と考えられており、結局、大洋における海水の水平大循環の主体をなすのは吹送流である。（井口正男）」——なるほど、こ

のように鄭寧精確に解説されてみると、海流の起こる原因をあれこれ探究した結果として最終的に絞られるのは「吹送流」ということになってしまう。ほかに傾斜流・密度流・補流も原因になっているのも確かであるけれど、「大洋における海水の水平大循環の主体をなすのは吹送流である」という結論にならざるを得ない。

ここまで書いてきて、校注者は、自分の青春時代に、たまたま「海流の成因」を説いた小冊子に接してひどく興味を抱いたことを想起した。旧制中学から旧制高校へ進学した時期で、第二次大戦が激しくなって図書も自由に買えなくなった情勢下、どうして当時の配給制度を潜り抜けて当該小冊子の新本が少年たちの手に渡ったのか、今から考えれば不思議にさえ感ぜられるが、兎にも角にも、校注者はその本を確実に読破読了したのである。著者および書名を宇田道隆『海』（一九三九年五月、岩波新書〈赤版〉）という。その中間あたりに長い章「海流」が据えられてあり、素養浅き少年なりに当時ひどく心惹かれたことを今以て記憶している。以下、必要個処を引いておく。「吹送流」「皮流」「地球自転偏向力」「エクマンの理論」「摩擦深度」「水の仮粘性係数」「世界の海流図と風系図との近似」などの概念は注意を払いながら、ごらん乞う。――

一体海流はどうして起るか？ これは誰もが抱く疑問でありながら未だ充分答案が出来てゐない。

表面流を説明するのに一番分り易いのは風による水の動きである。茶碗の縁をフーと吹くと中に盛られた水が動く。海上に風があれば波が立つ。風は其の波の頭に直接風圧を及ぼし、更に摩擦の力で海面の水を曳きずり動かすのである。水には粘性があるから一つの水層が牽き動かされると直ぐ其の下に接した次の水層が引きずり動かされる。かうして純粹に風で以て吹き送られた所謂吹送流を起すのである。水層の上皮が動くから皮流とも云ふ事がある。

この風の起す海流の理論に就てはスエーデンのワーリッド・エクマン教授の有名な研究がある。この話をするには先づ地球自転偏向力といふものを解説しなければならない。凡そ地球上で物が運動する時は赤道上を東西方向に動くならば地球の廻転によつても其の運動方向に影響はないが其他の運動の場合は次々の時間に其の物の在り場所の座標軸の方向が地球の廻転があるために變つて来るので、運動の方向も段々と北半球では進行方向に対し常に右手へ、南半球では常に左へとズレて来る。しかもこの偏れの角度は運動速度の大きい程之れに比例して大きく且つ緯度の高い程大きい。この様に方向の偏れることは恰かも地球自転のために力が働いたと同じ結果になつて来るので、之れを地球自転偏向力に影響されて方向が偏れたと唱へるのである。ズレの程度は海面から下層へ向ふ程深さに比例して大きくなる。それ故風が吹いて上層が動いて、下の之れに隣る水は地球自転偏向力によるズレが利いて来るので、下の方程次第に右手（北半球）へ流向が變つて来る。勿論流速は乱渦や摩擦の力に依つて表層から下層へと伝へられて行くので、深くなる程其の値が減るのである。風に依つて吹き起された表面流の方向はエクマンの理論に依ると、風の方向に対して北半球では右手の方向に四十五度、南半球では左手の方向に四十五度だけ偏れて居る。（之れの証明は数式を必要とするが本書では略する）。この四十五度なる数字は緯度には関わりない。實際測つて見ても大体四十五度に近い数字が得られて居る。深くなると流向は次第に一方へ偏れて行つて、遂に表面流と逆の方向になつてしまふ。此の深さでは流速が表面の廿分の一乃至廿三分の一の殆んど零と云つてよいからゐる弱流になる。（表面流二ノットの時はこの深さでは〇・一節である）。この深さを摩擦深度と云ひ、風の摩擦力がこの深さ迄利いて吹送流を起してをると見られるのである。摩擦深度は赤道では一番大きい、極の方へ向ふ程減少するのであつて、大西洋の赤道帯では普通百乃至百五十米と云はれてゐる。若し実際に摩擦深度を観測すればエクマン教授の式から $\mu$ といふ仮粘性の摩擦係数が算出し得る。風がビュフォート階級で風力三以上も吹く時は同じ緯度では流れの強さは略風力と正比例して増して居る。貿易風程度の平均毎秒七米位の風速に対しては緯度五



度あたりでは風の力で出来た海流の及ぶ深さ（摩擦深度）は二百米位、緯度十五度辺で百米、四十五度辺（例へば南千島沖）で六、七十米と勘定されてをる。浅海の場合はこれ迄の話の深海とは少しちがつて普通二、三十米の浅海では吹送流が充分利く代りに流向が風向と殆んど変りない位一致してをる。流速はふつう恒風風速の二一三％である。

風に依つて起つた流れが表面で速くて、下層程遅く、そしてさう深く迄は及ばないであらうといふ事は素人考へても分るが、流向が風の方向と四十五度も表面で違つてゐて、下層程一方へ段々偏れ廻つてをることは大抵の人には意外な事柄であらう。実際昔の学者は風と海流の流れる向きは相一致してをると考へてゐた。風と水との摩擦だけ考へれば当然さうなつてよい。然るにノルエーのナンセン博士が北極探險をした時始めてこの偏角を実測しこの現象を発見したので、エクマン博士が地球自転偏向力を考へに入れて之れを理論づけたのであつた。しかしエクマンの理論も其後色々不完全なことが分つて、吾が国では日高孝次博士や野満隆治博士などの方々が之れを改良発展せられたが、数理的に高等なものであるから茲には述べない。上記の偏角も水の仮粘性係数に依つて変化することも判つてをる。

兎も角世界の海流図と風系図と対照して見ると頗る近似してをることを見出し得るやうに、世界の大海流が風の力に大きな原動力を得てをることは疑ひもない。西流してをる南北赤道海流も主に其の上を年中吹きやめない東偏方向の貿易風により、又南緯北緯四十度乃至五十度附近を東方に向つて流れる海流は主に同地方に卓越する西偏の風によつて起つたものと考へられてをる。

元来海流を起す力には外力と内力とがあつて今述べた風は外力の方になる。外から加はる力即ち外力には風の他に太陽や月の潮汐を起す力や、気圧の変化に依るものがある。内力といふのは海の中に重い水の塊りや軽い水の塊りが分布してをることに原因する水圧の差が働かす力であつて、水温、塩分即ち水の密度を各水深に就て測定すれば求め得られる種類のものである。

この宇田道隆著『海』所載「海流」の記述は、もちろん、このままで『人生地理学』の提示する「海流の図と風向の図との一致」および「海流の主因が風力にあり」とのテーゼの正しさを照らしだすに十分であり、のみならず、その後の（ということは、一九〇三年以降の意だが）海洋学・地球物理学・海洋気象学の発展＝進歩のプロセスを経過しつつもなおテーゼとしての正しさを失わず一九九〇年代の今日に到っている。ただし、その間、学問的に《補正補強》が加えられ《組み換え》がおこなわれざるを得ないのは当然の理路である。この宇田著の岩波新書〈赤版〉の場合も、その増補版が一九五三年七月に出され、次いで全面的書き替えを決断して成った新版〈青版〉が一九六九年十二月に出された。

そうすると、本補注も当該新版に対して「知らぬ顔」を極め込んではいられなくなる。綿密になり亦た一部「発想転換」をおこなった新版の「X 海流とその利用」の章は、1 海流の存在と漂流、2 海流の測定<sup>セクション</sup>の節の記述を終えて、海流の原因を問う段どりに入る。――

### 3 海流の成因と種類

海洋大循環を支配する力は何か。対流圏環流の主な動力源は風の力と太陽放射の地方的差異に基く海水密度の不均一にあるものとされ、成層圏環流の主な動力源は極地方と赤道地方における海水密度の差異にあるものと考えられている。

**風成海流（吹送風）** 海上に風があれば波が立つが、さらに摩擦の力で海面の水を引きずり動かす。水には粘性があるから、上の水層がひき動かされるとすぐ下に接したつぎの水層がひきずり動かされる。こうして純粹に風だけで吹送された流れ、風成海流（吹送流<sup>すいそうりゅう</sup>）を生ずる。風で水層の上皮が動くから皮流ともいう。

吹送流の理論については一九〇五年スウェーデンのワーリッド・エクマン教授の有名な研究がある。

およそ地球上で物体が運動する時はその物のあり場所の座標軸方向が地球の廻転があるため変ってくるので、運動の方向もだんだんと北半球では進行方向に対し常に右手へ南半球では左手へとずれてくる。

しかもこのずれの角度は運動速度の大きさに比例して大きく、緯度の高いほどその正弦に比例して大きい。このように地球上の座標軸からみて方向のずれることはちょうど地球自転のために偏向力が働いたと同じ結果になる。地球自転偏向力は発見者の名をとってコリオリの力という。このずれの程度は海面から下層へと向うほど深さに比例して大きくなる。もちろん流速は乱渦や摩擦力により表層から下層へと伝えられ、深くなるほど減衰的にその値が減ってくる。

エクマンの吹送流理論によると、深い海の表面流の流向は北半球では風向の右手に四五度、南半球では左手に四五度となり、緯度に関係ない。深い方にくると流向はしだいに一方へずれて行って、表面流と逆方向になる深さになると流速は表面の五%以下（表面流二ノットならこの深さで〇・一ノット以下）の弱流となる。この深さを摩擦深度といい、風の摩擦応力がこの深さまで利いて吹送流を起していると思われる。摩擦深度は赤道の方には大きいが極の方に向うほど減少し、大西洋の赤道帯ではふつう一〇〇—一五〇メートルとされている。風が風力三以上も吹く場合は同じ緯度では流速は略風力に比例して増す。平均秒速七メートル程度の風に対し摩擦深度は緯度五度付近では二〇〇メートルぐらい、緯度一五度あたりで一〇〇メートル、四五度あたり（例えば南千島沖）で六〇—七〇メートルと推算される。二、三〇メートル深程度の浅海では吹送流が十分下まで利くかわりに流向が風向とあまり変らぬほどに一致している。吹送流速はふつう恒風風速の二—三%であるから秒速一〇メートルで〇・五ノット程度となる。

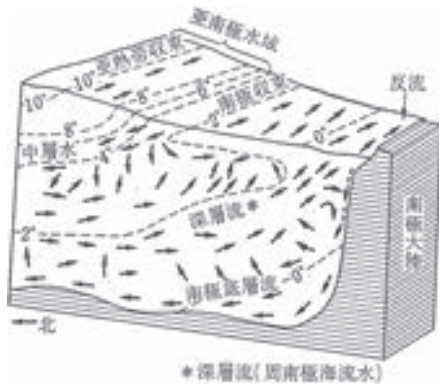
風によって起る流れが表面で速くて下層ほどおそく、そう深くまではとどかぬだろうとは考えついても、流向が深い海の表面で風向と四五度もちがっていて、下層ほど一方へずれ廻ることはたいいていの人には意外であろう。ノルウェーのナンゼン博士が北極海で氷とともに漂流中はじめてこの偏角を実測し、風向から三〇—四〇度右偏し、漂流速は風速の約五〇分の一ということを確かめてエクマンに研究を依頼し、理論づけができたのである。エクマン理論を基に W・ムンク、H・ストンメル、日高孝次博士など多くの方々がその後研究を発展させた。

世界の海流図と風系図と対照してみると、すこぶる近似していることがわかるように、世界の大海流が風の力に大きな原動力を得ていることは疑いもない。西流している南北赤道海流も主にその上を一年中吹きやめない東よりの貿易風により、また南北緯四〇—五〇度付近を東方へ流れる西風皮流は卓越する偏西風により起ったものとされている。この西風皮流（ウエスト・ドリフトといい、南半球でとくに発達している）は暴風圏を東進し、大陸にぶつかって北上流（ペルー海流、ベンゲラ海流、西豪州海流）、南下流（カリフォルニア海流、カナリー海流）を示す。南シナ海、インド洋では冬夏で北東から南西へ、南西から北東へ半年毎に季節風の逆転にともない季節風海流が逆転する。

純吹送流による輸送は風向と直角に北半球では右手に、南半球では左手に向いている。したがって亜熱帯の半永久的高気圧（北半球では時計廻り、南半球では反時計廻りの吹き廻し）の中央部に向って表層暖水の集積がみられ、海面はその水域を中心にもり上り、沈降海水は固有の「中央水」を形成する（北大西洋の「一八度水」は塩分三六・五%前後でひろく厚い一定不変を保つ水塊として有名である）。この形は卓越風の方向に走る海流の存在するとき恒常的に保たれる。同じように岸に沿って岸を右手に（北半球では右手、南半球では左手に）見るように風の吹く場合の純吹送流は表層水を岸に向っておしつけ、流れは岸に沿って風向に流れる（例えば春夏の対馬暖流、冬の北鮮寒流、秋冬の親潮など）。逆に岸を左手に（南半球では右手に）見るように風の吹く場合、暖かい表層水は岸から沖へおし出され、岸近くには二〇〇—三〇〇メートル深の下層から栄養豊かな冷水が湧昇してきて沖へひろがる（例えばカリフォルニア海流、ペルー海流、ベンゲラ海流、冬春の黒潮流域など）。

黒潮、ガルフストリームなどの世界的大海流は、その動力源を風のエネルギーから得て、まず風系と海水密度分布による大循環のはじまり、地球自転偏向力が緯度方向に変る関係で海流の「西岸強化」、即ち西部境界流が起るようになるためとされている。

**密度流、地衡流** 海流を起す力には外力と内力とがあってこれまでのべた風力は天体による起潮力や、気圧傾度力とともに外力に属する。内力は海中に密度のちがった軽い水塊や重い水塊の分布に原因



第12図 南大洋鉛直大循環

する水圧差による力で、水温、塩分を各水深で測定すれば海水密度の分布から求めることができる。

密度のちがった二水塊が相接して存在するときは、重い水は軽い水の下へもぐりこみ、軽い水は重い水の上へのろうとして自然の釣合の静止状態になるまで密度差のため水の運動が起る。風呂をたけばたきぐち近い水は暖められて軽くなり表面にひろがるので、かきまぜないと上ばかり熱くて下は冷たい。大洋の循環もこれに似ている。密度の差によって起る流れを密度流という（第12図）。

極海の水塊は夏以外たえず大気と氷に冷されて、水温が低いため低塩分にもかかわらず高密度で重い海水になっている。熱带上層はこれと反対にわりあ

い高塩分だが日射のため高温で低密度の軽い海水となる。そうすると密度の差から寒海の重い水は暖海の軽い水の下へもぐりこみ、釣合を求めて南北方向の海洋断面内に大循環が起る。地球自転偏向力が働くので東西方向にも運動が起る。地中海、紅海、ペルシア湾などは海面から蒸発がさかんで塩分が濃厚となるため高密度の海水が形成され、海底に沿って大洋に流出し、逆に大洋からこれらの海へ上層を低塩分の低密度海水が流入してくる。

いま一つの海洋断面で密度のちがいがもともになった水圧傾度力と、その水の運動速度に対応して働く地球自転偏向力が釣合う「地衡流」の場合、水中の摩擦項が省略できて、流れが定常と仮定すると、断面の海水密度分布がわかれば上下層の流速の差が計算できる。これが有名なノルウェーのV・ビヤークネス教授の力学的海流（地衡流）算出理論（一九一〇年）である。一般に深層では流れはごく弱いから、もし相当深い層まで（日本近海なら一〇〇〇—一五〇〇メートル深まで）水温、塩分、したがって密度が観測されていて、水平的にあまり差がなく、最下層の流速を零と考えてよい場合は、これを基準層（無流層）として、ビヤークネス公式に基いたヘラン・ハンゼン・サンドストロームの実用計算式により流れの速さを近似計算できる。相当多数点で水温塩分の観測が行われていて、密度分布、したがってその逆数の比容分布（便宜上標準量からの偏差を使う）から力学深度地形図をつくると、流線の分布がきまり、絶対流速、流向の推算ができる。（ウエレンシヨールは断面内の等密度線傾角の積算から浅海の地衡流を出す簡便式を出した）。黒潮、対馬暖流、親潮、赤道海流系でもおおかた地衡流として計算できる。

赤道直下ではこの計算式は適用できないが、その三〇哩あたり近くまで大体あてはまるという。黒潮流域では、水温の鉛直積算値を六〇〇メートル深の水柱について求めると海流を近似的に算出できる（対馬暖流域では三〇〇—四〇〇メートル深まででよい）。

このように降水や蒸発、日射などの影響による海水密度の変化が密度流を起す。海水の運動が廻転する地球上に起るときは地球自転偏向力がみかけ上現われる。それは海流を摩擦力とともに変化さす力である。

**傾斜流、補流、赤道潜流など** このほかに陸岸に風が吹きつけ、吹き払うために水を一カ所に堆積して海面に傾斜を起し、それが釣合状態にもどろうとするために起る海流を「傾斜流」という。

海底地形や陸地の配列のちがいによっても流れの模様はいろいろさまざまに変化する。一つの海流が起ったためにその水の補充をするのにまわりの水が動いてできる海流を補流（または補償流）という。ミンダナオ海流は北太平洋赤道反流の補流としてみられる。北赤道反流は西行する北赤道海流（流量四五〇〇萬立方メートル／秒ぐらい、秒速〇・五—一ノット）と南赤道海流（西行流一—一・三ノット）にはさまれて東行する流速〇・七—一・二ノットぐらいの海流（流量六〇〇〇萬立方メートル／秒）で、夏季発達し、三、四月に衰える。赤道反流も地衡流の一種と見なされる。実際の海では地衡流、吹送流など重ってあらわれることが多い。通常吹送流は上層に限られ、傾斜流は近岸に多く、密度流・地衡流は表層下の流れにわりあい多い。世界一の流量（一億五〇〇〇万—一億九〇〇〇萬立方メートル



／秒)を示す周南極海流は、表層で西風皮流となるが、厚さ二〇〇〇メートルをこえている。アフリカ東岸のソマリー海流は夏季南冬季節風流として加速され最大七ノットの流速が実測され、世界一の流速をもつ海流となった。ただし冬季は逆転し流速三ノットぐらいで逆に南下する。

湧昇流(上昇流)と沈降流(下降流)も補流の一種とみられる。湧昇流は流線の発散を示し、沈降流は流線の収束をみせる。同じような発散域、収束域もある。

一九五二年太平洋の赤道直下で表層と逆向きに東行する表層下一〇〇メートル深を中心に最強三ノット余(流量四〇〇〇万立方メートル／秒で黒潮に匹敵する)の新海流が偶然のことから発見され、「赤道潜流」(エクワトリアル・アンダーカーレント)と名づけられた(T・クロンウエル、R・B・モンガメリー、ストロープ、一九五四年)。その後大西洋にも見出され、

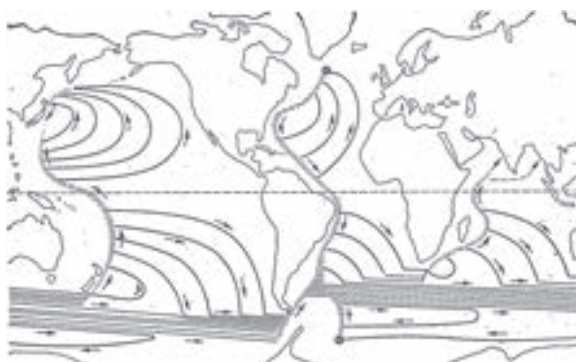
中心では二・五ノットの東行流で高塩分水を、ブラジルの方からアフリカのギニア湾の方に向けて運んでいることがわかった。インド洋でも赤道潜流は冬の北東季節風末期から春季にかけて現われ、流速一・五ノット程度ということがわかった。また最近南赤道逆流が南緯一〇度付近で東行流として注意されている。

世界三大洋の底層流の大循環については一九五七年H・ストンメル博士が理論的に研究し、南極洋のウェッデル海方面を主源としてめぐっているさまを明らかにした(第13図)。英国国立海洋研究所のジョン・スワロー博士は一九五五年一定深度に沈んで超音波を発信する「中立浮き」を発明し、深層海流の流速を測定するみちを開いて、北海、地中海、大西洋、太平洋、インド洋と測流したところ、二〇〇〇—三〇〇〇メートルで〇・一—〇・四ノットという意外にさかんな流動のあることを見出した。

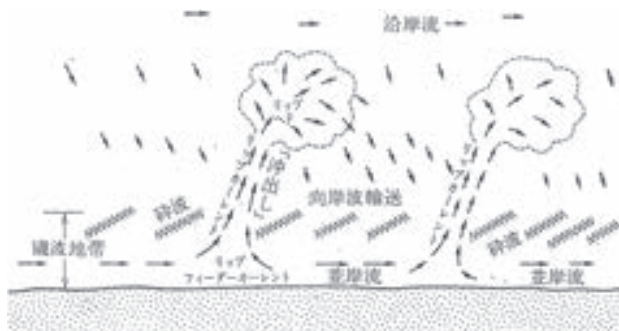
一方、第14図の示すように沿岸海流系の研究も近年急速に進歩し、並岸流、「沖出し」と日本で俗称するリップカーレント(流速二—三ノット)など航空写真にもとられ、明らかになった。この流れは台風くる前、海水浴場で溺死者を多く出すのでとくに注意する必要がある。

#### 4 世界の海流と鉛直大循環

**世界の表層大海流** 海流図(第15図)に示すように、赤道無風帯に東行する赤道逆流があり、その南北に西行する北東貿易風に対応した北赤道海流、南東貿易風に対応する南赤道海流がある。亜熱帯収束線をこえる高緯度側には偏西風域に対応する東行流の西風皮流がみられ、さらに高緯度の極近くにはまた偏東風に対応する西行流の東風皮流が卓越する。また大洋の西部には岸沿いに西部境界流といって向極強流帯が発達し、大洋東部には、岸沿いに東部境界流といって向赤道流が発達する。大観すると、赤道と対称的に北半球に時計廻りの大環流、南半球に反時計廻りの大環流が発達している。しかし大洋の中央に対して大環流中心は西偏し、西部に幅狭い強流をみせるため東西非対称的である。そして



第13図 世界海洋底層流 (H. Stommel, 1957)

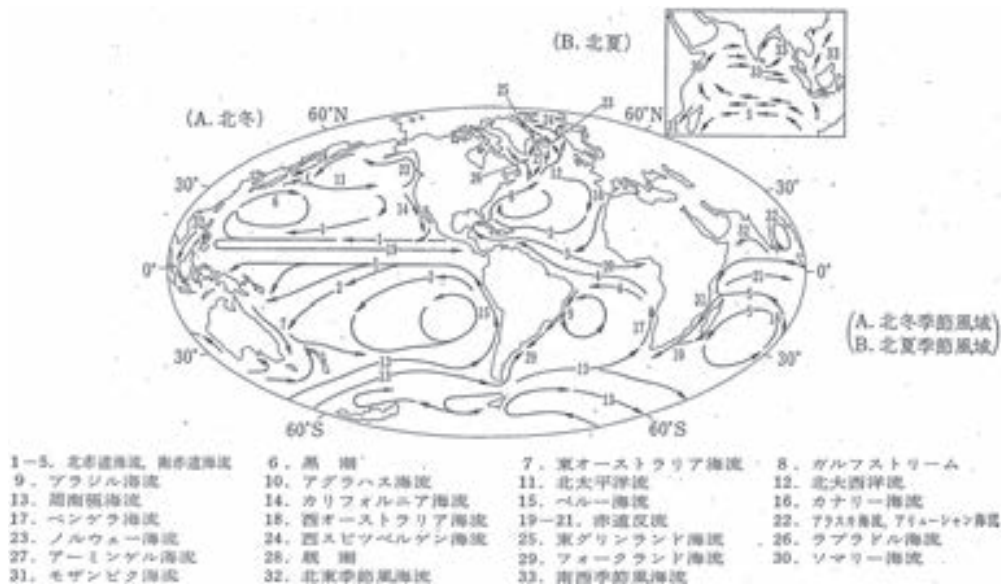


第14図 沿岸海流系

このような大海流系の分布は風系、気圧系の分布と密接な関係をもち、とくに卓越風の分布に似ている。海流がこのように環流するうちに熱帯では暖められ、温帯、寒帯では冷やされ、降水、流出陸水の多いところでは塩分をうすめられ、蒸発がさかんで降水の少い海域では塩分が高くなり、そのほか溶在酸素、栄養塩類その他水質にも変化が起る。

また下層水の湧昇が表層水にも影響して海流を変化させる。黒潮異変のような現象も起るが、ペルー海流、ベンゲラ海流、カリフォルニア海流のように湧昇性発散海流もみられる。

冬と夏で北半球、南半球の海流はかなり変る。とくにインド洋北部（南緯一〇度以北）、アラビア海、紅海、南シナ海、東シナ海、豪亜地中海、ニューギニア近海などの海流は、冬夏で季節風とともに逆転するほどの大変化をみせる。北緯三〇度—南緯三〇度の水帯での冬夏的大海流の流向の変化は第15図を一目でみてはっきりわかる。北太平洋西部の黒潮、北大西洋西部のガルフストリーム、北インド洋西部のソマリー海流、南太平洋西部の東オーストラリア海流、南大西洋西部のブラジル海流、南インド洋西部のモザンビーク海流およびアグラハス海流は向極強海流で高温、高塩分で清澄な濃青の熱帯亜熱帯からの水を選ぶ暖流である。流速は一—二ノットのものから最強六、七ノットに及ぶ。それぞれの半球の夏季に最も優勢である。一方東部では、北太平洋のカリフォルニア海流、北大西洋のカナリー海流、南太平洋のペルー海流（フンボルト海流ともいう）、南大西洋のベンゲラ海流、南インド洋の西オーストラリア海流と、いずれも近岸に発達する向赤道の海流である。比較的冷たく、低塩分で帯緑色に濁っており、いちじるしく富栄養、高生産の水である。流速は西部境界流に比しゆるやかで、湧昇発散性のものが多い。西部境界流は幅せまく強勢で、その西側に渦流的反流をともなう。このような東西の差異は大洋両岸気候にも現われている。高緯度には逆に北半球に反時計廻り、南半球に時計廻りの環流が発達する。とくに海の西部には北太平洋の親潮、東カムチャッカ海流、北大西洋のラブラドル海流、東グリーンランド海流、南大西洋にフォークランド海流など向赤道寒流がみられている。これも低温、低塩分、富栄養で濁った高生産の海流である。地域的に著名なのは太平洋のアラスカ海流（アラスカ南岸からアリューシャン列島南沿いに西行する暖流）、黒潮続流と北方の北太平洋流すなわち西風皮流、ニューギニア海流（ニューギニア北方の暖流、夏季強勢）、大西洋のギアナ海流（南米ギアナ沿海の北西に向う暖流で、赤道海流の続流）、ギニア海流（ギニア湾）、ガルフストリームの続流の北大西洋流—ノルウェー海流などがある。



第15図 世界大洋模式的表層海流循環図

——岩波新書〈青版〉の宇田道隆『海』の記述は、海流の成因を「新視角、から捉らえつつ<sup>しか</sup>而<sup>あま</sup>も剰<sup>あま</sup>すところ無く説明し尽くして、興味を誘うに十分である。旧版（〈赤版〉）で解明し切れなかった疑問点をひとつひとつ謎解きしてみせ、《学問の日進月歩》ということをも痛感させてくれているからである。それにつけても思うのだが、われわれもまた、宇田道隆に倣<sup>まね</sup>んで、九十年前に書かれた『人生地理学』所載記事の正しさを論証し実証するに足る《補完的労作》complementary labor を今こそ引き受け且つ果たすべきではないか。そのことを自他に向かい願望すればこそ、あるいは過剰<sup>わた</sup>に<sup>あえ</sup>互<sup>あ</sup>っているかも知れない引用紹介の作業を、敢て憚らず続行したのである。

35 すでに无常の風来りぬれば乃ち二つの眼、忽ちに閉ち、一つの呼吸なく絶えぬれば紅顔空しく変して桃李のよそほひを失ひぬる時は、六親眷族あつまりて歎き悲むとも更に其甲斐あるべからず、云々（六五ページ、注13）

ここに引用された蓮如上人『御文』（牧口常三郎は『御文章』の呼称を採択しているが、他に『消息』『宝章』『勸章』『勸文』『御書』などなどの呼び方もあり、それぞれに時代背景や真宗教団事情〔より正確には、本願寺教団のお家事情と称すべきかも知れないが〕を反映＝表出さべく特別に採用されたものであるから孰<sup>いず</sup>れを良しと決定することは出来ないはずだが、現在の歴史学では『御文』を使用するのを以て統一見解＝合意としている）の最後から二番の位置に据え置れた<sup>じょう</sup>条のなかに見える。二百二十一通から成る『御文』のうち、一四六一年（寛正二年）三月に書かれた《筆始めの御文》が、もちろん、いちばん有名であるが、人生無常を情感一杯に歌い上げたこの最後から二番目の法語（最終条に据えられた「侍能工商之事<sup>しのうこうじょう</sup>」と同じくらい重要とされている）も、制作年次不詳ながら、真宗門徒のあいだでは《白骨の御文》として口号<sup>はっこつ</sup>まれる<sup>おふみ</sup>機会<sup>くちざさ</sup>の多い、きわめて抒情詩<sup>りりカル</sup>的な名文である。われわれ今日の文学青年<sup>ぶんがくせいねん</sup>あがりの老インテリにとってさえ、これは、じゅうぶん吟嘯<sup>ぎんしやう</sup>し朗誦<sup>ろうしやう</sup>するに値<sup>に</sup>いする、形式内容俱に兼備した《最良の日本語》である、と言って差し支えない。

さて、補注の果たすべき役割として、茲<sup>ここ</sup>に《白骨の御文》全文を掲示しておかねばならぬ。以下に掲げるテキストは、『日本思想大系17・蓮如／一向一揆』（一九七二年九月、岩波書店刊）所載の校本（笠原一男校注）に依拠している。

七七（内） 夫、人間ノ浮生ナル相ヲツラ、観ズルニ、オホヨソハカナキモノハ、コノ世ノ始中終マ  
ボロシノゴトクナル一期ナリ。サレバ、イマダ万歳ノ人身ヲウケタリトイフ事ヲキカズ。一生スギヤス  
シ。イマニイタリテ、タレカ百年ノ形体ヲタモツベキヤ。我ヤサキ、人ヤサキ、ケフトモシラズ、アス  
トモシラズ、ヲクレサキダツ人ハ、モトノシヅク、スエノ露ヨリモシゲシトイヘリ。サレバ、朝ニハ  
紅顔アリテ、夕ニハ白骨トナレル身ナリ。スデニ無常ノ風キタリヌレバ、スナハチフタツノマナコタチ  
マチニトゾ、ヒトツノイキナガクタエヌレバ、紅顔ムナシク変ジテ、桃李ノヨソホヒヲウシナヒヌルト  
キハ、六親眷属アツマリテ、ナゲキカナシメドモ、更ニソノ甲斐アルベカラズ。サテシモアルベキ事ナ  
ラネバトテ、野外ニヲクリテ、夜半ノケブリトナシハテヌレバ、タゞ白骨ノミゾノコレリ。アハレトイ  
フモ中、ハロカナリ。サレバ、人間ノハカナキ事ハ、老少不定ノサカヒナレバ、タレノ人モ、ハヤク

ゴシャウ キチダイジ コハロ フアミ ダブチ ネムブチ  
後生ノ一大事ヲ心ニカケテ、阿弥陀仏ヲフカクタノミマイラセテ、念仏マウスベキモノナリ。アナカシ  
コ、、、、。

これが《白骨の御文》と呼ばれる抒情詩 das lyrische Gedicht の全文である。さいわい、牧口の引用にかかる「すでに無常の風来りぬれば」以下のセンテンスについては、日本思想大系本の頭注が<sup>クローズ</sup>句節ごとにとびとびに現代語訳を掲載しているのも、それを<sup>つな</sup>繋ぎ合わせておくことにしよう。すでに無常の風が吹き来<sup>き</sup>たつたとなると、二つある限はたちまち閉じられてしまい、一つの呼吸は永久に休止<sup>とこしえ</sup>してしまうほかなくなる。「直ぐに死んでしまうので、紅顔も空しく変わり、桃や李の花のような美しい姿もなくなってしまった時は、すべての血族・親族が集まって嘆き悲しんでも、全くその甲斐もないであろう。」というのが笠原一男注解である。これで充分なのだが、<sup>ついで</sup>序でに、この段落を含めた《白骨の御文》の<sup>た</sup>湛えるリリズム的情感に強い理解を示した森龍吉の解説文（講談社現代新書『蓮如』〈一九七九年八月刊〉所載）にも眼を<sup>や</sup>遣るのは、必ずしも無駄ではない。「ここにみる無常の強調には、いくたびかすでにのべた十五世紀の乱世における生死のきびしい現実が横たわっている。それは近代の私たちが感傷的詠歎と評し去るような実態ではない。蓮如は親鸞のように『生死無常のことはり、くはしく如来のときをかせおはしまして候うへは、おどろきおほしめすべからず』（『末燈鈔』六）ときびしい論理的表現で語るのではなく、民衆の感情にうけいれやすい感性的表現に訴えるのである。そこに蓮如のレトリックの特徴があった。この特徴は生得の性格に由来するものか、大衆布教の経験から得たものか、おそらく両面から形成されたものであろう。」（4 思想と遺産、1 思想像とその風姿）と森は言う。さらに森は「蓮如が感性的表現を好んだのは、日本人の特質をもっとも素朴に宿している民衆への感情移入<sup>アインクユールンク</sup>からと考えられるが、ただそれだけではない。かれ自身も情緒的実感に限りなく魅せられる性格をもっていた。」（同）とも言う。傾聴すべき見解と評すべきであろう。

もともと「若き牧口、が蓮如上人法語『御文章』を引用したのは、風に関する人文地理学的記述を進行させてゆく「文脈、のなかにおいてであった。それは、<sup>あえ</sup>敢て言えば宗教以前の、極めて抒情詩的感受性の次元の、世界認識のヴァリエーションであった。

36 蓮如上人兼寿（六五ページ、注14）蓮如は、真宗教団中興の祖と<sup>うた</sup>謳われ、日本浄土教史のなかの重要人物であるのみならず、ひろく日本仏教史全体の流れを通覧してみても軽視することの<sup>かな</sup>能わぬ《天才的宗教家》のひとりである。鎌倉仏教の一翼を<sup>にな</sup>担い文字どおり《宗教改革》の実践者であった親鸞は、有名な<sup>たん にしやう</sup>『歎異抄』のなかで「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」と明言し、阿弥陀仏の前では一切衆生が平等でなければならぬゆえ知識（＝坊主）が偉いぶるのは誤っていると説き、<sup>あえ</sup>敢てみずから教団を持つことを拒否した。ところが、開祖親鸞とは反対に、中興の祖蓮如は<sup>あえ</sup>敢て本願寺教団を興隆せしめ、その再組織と強化とに力を尽くし、自己教団を磐石<sup>じゃく やす</sup>の安きにみちびく布教事業の成功者となった。しかし、蓮如の成立はけっして個人的天才のみから<sup>もたら</sup>齎されたと解釈せらるべきではなく、その背景および基礎条件に、十四～五世紀における



村落や農民の自立（＝惣村組織の進展）とか、商人・職人の社会経済的台頭とかの諸要素が準備されてあったことを、なんとしても見失わないようにすべきである。

まず『国史大辞典 14・や一わ』（一九九三年四月、吉川弘文館刊）に依拠し、できるだけ公平かつ客観的にその《個人史的履歴》を確かめておくことにしたい。

れんによ 蓮如 一四一五―一九九 室町時代の僧侶。真宗の本願寺八世。幼名布袋・幸亭。諱兼寿。号信証院。明治十五年（一八八二）慧燈大師と追諡。応永二十二年（一四一五、伝二月二十五日）生まれる。父本願寺七世存如。母は不詳で西国、豊後、備後鞆（とも）の人などといい、六歳で生別。永享三年（一四三一）夏、十七歳で中納言広橋兼郷の猶子として青蓮院で出家。父に就学し貧困中に青年期を過ごした。嘉吉二年（一四四二）二十八歳（長子順如誕生）前に如了尼（下総守平貞房女）と結婚しやがて死別、以後蓮祐尼（如了妹）・如勝尼（家女房）・宗如尼（前参議藤原昌家女）・蓮能尼（治部大輔源政栄女）とおのおの死別し順次結婚した。長禄元年（一四五七）六月十八日存如没し、叔父越中瑞泉寺如乗の周旋で、四十三歳で継職。以後、近江・摂津・三河などに活発な布教活動を展開した。ために寛正六年（一四六五）正月十日（一説十一日）延暦寺衆徒に東山大谷の堂舎を襲われ、門弟近江堅田の法住、三河佐々木の如光らの奔走で西塔院末寺として毎年礼銭三千疋を納め落着したが、三月二十一日再来襲しすべて破却された。以後蓮如は南近江諸方を遍歴し、応仁二年（一四六八）三月山徒の堅田襲撃（堅田大責）を避けて大津近松に移り（一説翌文明元年（一四六九））、翌年坊舎を建て祖像を移した。ついで文明三年四月越前吉崎へ移り坊舎や多屋を建てると、北陸などの門徒が参集して繁栄したが、加賀の富樫一族と本願寺門徒の抗争に対する近侍者下間蓮崇の密計を避け、同七年八月退去した。以後河内出口・和泉堺などに移り、同十年正月山城山科に本願寺を再興、十二年十一月近松から祖像を移し、やがて本堂・影堂・北殿以下の諸堂宇・土居などを整え、寺内町を形成、殷賑を極め、近隣に隠居所南殿を設けた。延徳元年（一四八九）八月職を実如に譲り隠居し、明応五年（一四九六）十月摂津大坂に坊舎を建立した（現大阪城地）。同八年二月二十日大坂から山科南殿に入り、三月九日実如・蓮綱ら五子に遺誡、二十五日正午に没した。八十五歳。子女は十三男十四女。その生涯は莊園制が崩壊して惣村制が進展する戦国時代前期にあたり、道場設立や講組織による地方門徒の結合を足場に、本願寺教団を急速に発展させた。布教には教理を平易に説いた『御文』（御文章）を用い、また父存如が親鸞の『教行信証』行巻から剔出した『正信偈』と親鸞作「三帖和讃」（浄土・高僧・正像末の三和讃）を重視して勤行形式を定め、文明五年はじめて開版し、『正信偈大意』を著述し、一方五十九点以上の聖教を書写し百数十点以上の名号・宗祖絵像などに裏書き無数の六字名号を書いて門弟に下付し、また王法為本などを説いた。高田専修寺系の三河上宮寺・勝鬘寺・本証寺・仏光寺経豪（興正寺蓮教）、越前三門徒系正闡坊善鎮らが帰入した。後人編纂の言行録は多いが、十男実悟編『蓮如上人御一期記』二百二十三条、中世末編『蓮如上人御一代記聞書』三百十六条は代表的なものである。

（柏原 祐泉）

この過不足無き、いかにも最優良辞典掲載記事に相応しい《人物伝記》を引用するだけで、もはや何物も付け足す必要が無いようにおもわれる。だが、それと同時に、なにか、あまりにも素っ気無いような感じも残る、というのが正直のところである。そこで、もうすこし《人間臭い》記事（なにしろ、蓮如そのひとが恐ろしく人間臭さの横溢する灰汁の強い人物なのだから）を紹介すべきではないかと考え直し、蓮如研究では今日屈指の業績を挙げたとされている笠原一男（もと東京大学歴史学教授）の好著『蓮如〈学術文庫版〉』（一九九六年四月、講談社刊）に典拠を求め、以下に引用することにした。この本は、旧著『乱世を生きる―蓮如の生涯―』（教育社刊）に新たに加筆・再構成をほどこして成ったものである。その「第三章 蓮如の生涯／四 蓮如



という人」をひらくと、こう見える。――

### 1 念仏者はみな兄弟

蓮如は貧しい庶民の心の底の底まで、理解できた人であった。召使を母にもち継母のもとで、ことのほか冷たい仕打ちのなかに育ったのが蓮如であった。三度の食にも事欠く部屋住み時代の生活体験こそ、蓮如が、社会の底辺に生きる庶民の心をつかむうえに、大きな役割を果たした。蓮如の門徒に接する心と態度には、身分と貧富によってなんら変わるところがなかった。

蓮如は全国の村むらから京都の本願寺を訪れる末端の門徒にたいして、寒い時節には酒の燗<sup>かん</sup>を熱くしてもてなし、道中の寒さをねぎらった。また、酷暑の折りは、酒などを冷して門徒をもてなした。もし、取次ぎの者の怠慢で、門徒の来訪を蓮如に遅く取次ぐようなことがあれば、厳しく注意をあたえた。そして、つねづね蓮如は、「御門徒衆を待たせ、おそく対面するようなことはいけないことだ」（実悟旧記）と注意をあたえている。

末端の門徒が、はるばる遠国から上洛した場合、雑煮などで道中の労をねぎらうことを始めたのも、蓮如の時からであった。その際、本願寺に勤務する者は、どうせ田舎者だからという気持ちで地方の門徒を粗末に扱いがちであった。そんなことは知りつくしている蓮如は、門徒接待の料理などすこしでも味を悪く、いい加減につくってはならないと、常々料理人に注意をあたえていた。

ある時、蓮如が、中居衆が門徒に出そうとしている雑煮を、ふと取寄せて味見をしたところあまりにも塩辛く、味が悪かった。蓮如は誰がつくったかをきき、その料理人に、「遠国からはるばる上洛された親鸞聖人の御門徒に、このようないい加減な料理をこしらえるとは、けしからぬことだ」（本願寺作法之次第）といって、厳しく叱っている。

蓮如はすべての門徒を親鸞の門徒と考え、自分と同朋・同行<sup>どうぼう どうぎょう</sup>、すなわち同じ信仰仲間と考えた。真宗における人間関係を象徴する同朋・同行の精神を声を大にして叫び、実践した人は、真宗の歴史のなかで親鸞と蓮如であったといえる。蓮如は門徒にたいして、それが田舎の衆であろうと、本願寺勤務の衆であろうと、差別することなく、寒い冬の夜でも、蚊の多い夏でも、平座で膝をまじえて雑談をかわすといった気軽さで接した。それというのも、門徒たちに気兼ねさせることなく信仰について質問させ、信心をとらせるためであった。こうした態度は、蓮如以前の本願寺法主には、まったく見られないことであった。

蓮如は、庶民によって支えられ、庶民の救いをモットーとするのが真宗であることを、はっきりと自覚していた人であった。蓮如は庶民の心をつかむには、「上臈<sup>じょうろう</sup>振舞<sup>ふるまい</sup>にては成るべからず」といっている。すなわち、貴族ぶるな、尊大に構えるな、民衆から煙たがられるぞ、といっている。民衆をなるべく身近に引きよせるために上臈ぶってはならぬといい、席の上下なく同じ床にすわる平座で門徒と接したのである。

いうまでもなく蓮如のそうした態度は、開祖親鸞の同朋・同行、すなわち、念仏者は平等であるという考え方を忠実に継承し、実践したものであった。蓮如は「四海の信心の人はみな兄弟」（空善記）という精神で生きた人であった。

### 2 民衆と膝をまじえて

蓮如は、その生涯を通じて民衆のなかに進んで溶けこんでいった。自分の足で村を歩き、農民の生活の実態と村の構造をはっきりととらえていた。蓮如は、どのような貧しい門徒の家でも差別することなく訪れ、一人でも多くの民衆に肌で接しようとした。

蓮如が奥州に布教の足を延ばした時のことであった。蓮如の説法を聞いて、嬉し涙を流していた貧しい老夫婦のことを思いだした。その夫婦の信心の様子を人づてに聞き、わざわざ<sup>ふつかに</sup>二日路の悪路<sup>いと</sup>を厭わず、その門徒の家を訪れた。突然の蓮如の来訪に気も動転し、まず食事に何を差し上げようかと思ひ悩んでいる夫婦に向かって、蓮如は「そなたたちは、日ごろなにを食べているのか」と尋ねた。夫婦は「稗<sup>ひ</sup>と申すものを食べております」と答えた。蓮如は、わたしもそれが大好物だといって、稗の粥をすすって談話に一夜を明かしたという。（空善記）

蓮如が村むらの布教における心構えとして、前述のように「村において正しい信仰をもたせたいものが三人ある。その三人とは坊主と年寄と長である。この三人さえ村むらで本願寺の信仰に入ったらば、その他の末端の農民はすべて信者となり、本願寺の仏法は繁昌するであろう」といったのも、蓮如自身が自分の体験で知った村の生活実態を踏まえての発言であった。

そうした蓮如の布教態度は、末々の坊主にも浸透していった。近江の堅田の本福寺は子孫への戒めとして、「御門徒のなかへ行くのなら、その時の時節時節に採れるもの、たとえば麦飯、粟飯、蕎麦がき等が食べたいといえ。庶民に煙たがられ、尊大ぶってはならない。そのようにしなければ、一人も近寄ってくるものはあるまい」(本福寺跡書)と戒めている。

蓮如は庶民に接する時の服装にも心をつかった。真宗は凡夫に、村々の庶民に、支えられて発展している宗教であるから、あくまでも貴族ぶったり、尊大な態度をつつしみ、決して衣服なども上から下まで貴げにしないことをモットーとした。そのため衣も墨染めにせず、ねずみ色を常用し、衣の袖を短くして貴族僧ぶらず、丈も短くせよといっている。(空善記)

そして蓮如は相手をみて、その要望と能力に応じて法を説くことを忘れなかった。蓮如の子実悟や蓮淳は父蓮如が「われは人の能力を考えて、それに応じた法を聞かせたといった」と伝えている。相手が何の知識もない庶民であれば、彼等が理解でき、信心が得られるために、親鸞の教えの要点を解りやすく要約して説き聞かせた。(実悟旧記・蓮淳記) そのためにつくられたのが御文であった。

蓮如は説法するとき、門徒が退屈した場合には、なんでも人びとが喜びそうなことを話し、耳を傾けたところで、また仏法のことを話した。いろいろの手段を駆使して、人に法を説いたのである。また時には能を演じてみせ、法話にあきた人の心をつろげ、人が自分に近づいて来ると、また法話を続けるのであった。(実悟旧記)

また、信者が法話を聞く態度にも、蓮如は堅苦しいことはいわなかった。農民は陽が落ちるまで働きつづけているのである。それから道場に集まり、坊主から法を聞くのである。門徒に堅苦しい聞法態度を強いることは禁物であった。蓮如は、門徒の聞法態度などまったく竟に介さなかった。蓮如は、門徒にたいして聞法態度を良くせよ等と煩わしいことをいうから、庶民は億劫になって仏法から遠ざかるのだといっている。そして従来の堅苦しい聞法態度を批判して蓮如は、「行儀を正しくして正しくなるならば、正しくして聞け。正しくして聞くことがまったく不可能ならば、生まれたままの姿で聞け。行儀がよくなってからあとで、などといわずに、まず法を聞け」(実悟旧記)といっている。

蓮如が求める聞法態度は、末寺の坊主にもみられ、「隣郷・隣村の御門徒の里へ、親しみやすい聖教を懐に入れて行き、一行ずつ読め。その一冊を始めから終わりまで読み通して、聞かせよう等と思ってはならない。聞く人の根気が続かず、あきて居眠りをし、門徒に嫌われるぞ。門徒がもうすこし聞かせて欲しい、聞きたいというところで、話をやめよ。それでももうすこし続けたいと思うならば、相手の好きそうな雑談をして、笑わせて、眠気の覚めたところで、また経を読め」(本福寺跡書)という説法のテクニックが残されている。

蓮如は盛んに寄合ひ、ディスカッションを奨励し、「四、五人の信仰仲間がいたら、集まって話し合いをせよ。必ず五人は五人で有意義に話し合えるものである。よくよく話し合いをせよ」といっている。また、「愚者三人集まれば、知者一人の知恵が出るというたとえがあるように、何事も仲間が集まって話し合えば、大きな成果が上がるものだ」(実悟旧記)ともいっている。

また、門徒にとって寄合ひは、酒や茶を飲んだり、飯をたべて世間話に花を咲かせる楽しみの一時を過ごせる場であった。門徒たちは寄合ひの場で、連歌も楽しんだ。信仰のほかに、リクリエーションの役割をも門徒の寄合ひは、果たしてくれたのである。

多難にして華麗ともいえる蓮如の生涯にも、ようやく終りが近づいてきた。

——右の笠原論文をよむと、なるほど。庶民救済のために、また門徒教勢拡大のために、蓮如が並並ならぬ心身労苦を費やし且つその効果をじゅうぶんに博したのだ、ということが、いっそうはっきり判る。それが、蓮如の人間臭横溢の全生涯だったと言えるであろうし、受け取る側

の好悪感情は別にして、やはり、蓮如の生涯は日本仏教史有数の<sup>ゆうすう</sup>巨人像、を彫り上げて今日にまで聳えつづけていると見るべきであろう。

それゆえ、こんどこそ先行研究業績からの引用紹介を終えて差し支えないはずであるが、まだ何か物足りないような感じが残る。何が物足りないのかと、校訂者なりにさんざん自問自答した末に漸と判ったことは、蓮如の捨身<sup>すてみ</sup>の布教の指し示す《現代的意義》、および蓮如によって興隆した真宗教団の荷<sup>にな</sup>うべき《現代的意義》についての言及が欲しい、という点である。この点に関しては、校注者の知るかぎり、森龍吉『蓮如』（一九七九年八月、講談社現代新書版）がわれわれの欲求に<sup>こた</sup>えてくれている。同書巻末「おわりに」の章<sup>チャプター</sup>に聞こう。

もう一つの問題は、信仰の現世化と生活倫理化の問題である。実践家としての蓮如が重視した着目点はここにあった。それがまた蓮如によって再構成された新しい真宗の、他の仏教と性格を異にする重要なポイントであり、在家民衆の宗教として発展した原動力でもある。

それはまず、経済行為に宗教的意義を与えるという画期的な試みである。その端緒は、山科本願寺南殿に隠居したころの一挿話にあらわれている。ある日、一人のみすぼらしい女が訪れて、百四十文の小銭を報謝のために差し出した。側近の奏者はすげなくうけとったが、蓮如は呼びもどしてわけを聞いた。すると女は麻糸の小売をして、一かせ売れるたびに、口銭から一文ずつのりけて蓄え、百四十文に達したので持参したといった。かの女の話聞いた蓮如は、「これは一段の志也。なんぢは此間に只一度来たれども、百四十度如来と開山聖人へは参りけり」（『実悟記』）と称讃した。それは商いをする<sup>わざ</sup>ことも、農事に精を出すことも、奉公することも、芸能で人を慰めることもすべて如来への仏恩報謝の業であるという、カルヴァンの召命観にも似た、新しい職業観の誕生である（この問題については、R・N・ベラー『日本の近代化と宗教倫理』（原題『トクガワの宗教』）、堀・池田訳参照）。

真宗に経済倫理が成長し、一種独自の生活姿勢を形成しえたのは、蓮如の現実主義の支柱となった鋭い経済感覚によるところが大きい。吉崎・枚方・堺・山科・大坂が、中世後期の経済地理のうえていかなる意味をもっていたかを考えれば明らかである（後藤文夫『真宗と資本主義』参照）。蓮如によって進められた仏教の来世主義からの強力な転換姿勢は、民俗への習合をはらむ姿勢と対立するが、同時に相補的に作用しながら、民衆の生活意識に真宗独自のエートスを創出する道を開いた。

すでにみたように、蓮如の思想をとらえるために、戦後の研究で提起された視座と映像は三つある。一つはエンゲルスの『ドイツ農民戦争』に触発された一向一揆研究によって描出された蓮如像であり、もう一つはマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に示唆された近代化論に照射された蓮如像である。この二つの映像は方法論を異にするけれども、いずれも真宗とプロテスタンティズムとのあいだに強い類似性を発見し、中世から近代への転換期に立つ思想家としてとらえる共通観点をもって、近代における蓮如の再発見に鮮明な視角を提起した。しかし、比較思想史からみればその前提には重要な再検討の余地を残している。

しかし、この二つの蓮如像が歴史の西欧的変革面から照射されたのに対して、第三の民俗学的側面からのアプローチは、真宗と民俗の関係を追究するところに浮かび出る間接的な映像である。しかしその特質はさきの二つの視座とは異なり、歴史の土着的連続面から照射された映像である。

この三つの視座と方法がいかに消化されて全体像に迫りうるかは今後の課題であるが、さらにそこには親鸞思想との比較、継承と変容の関係に対する究明が、真宗教学史をふまえて提起されねばならない。それらの研究の進んだのちにはじめて全貌がとらえられるであろう。

蓮如は中世後期に生まれ、変革期のダイナミックな本質を鋭くとらえた実践的思想家であると同時に、一筋縄の思想家という人物像ではとらえきれぬ巨大な宗教的事業家であった。かれの歴史に対する経験論的感覚は終末の中世的地平をこえて、近世から近代へ方向を直観的に先取していた。変革期が新旧二つの要因の沸騰するつばであるように、蓮如の思想には矛盾とアンビバレントな要素がはげしくふ

くまれている。そのなかで、「仏法を主とし世間を客人とする」主体性を貫くために、二枚腰、三枚腰の縦陣的な思想と行動を展開してみせた。この姿勢のなかから何を引き出すかは、歴史的条件を大きく異にしているが、近代の終末に立って新しい地平の展望に悩むわれわれにとって、他山の石以上の意味をもつ問題であろう。避けえない歴史の強力な変革と連続、この二つの力に蓮如<sup>れんじょ</sup>ほどもまれ、苦勞した人物はけだし稀有である。

——この森龍吉『蓮如』最終章の提示する蓮如彫塑像は、第二次大戦後になって自己反省と普遍思考的歴史的展望とから捉え直された（森は熱心な真宗信者で龍谷大学教授を勤める人物である）《思想家像》であり、さらに未来にむかって模索された《日本仏教者像》である、と見てよい。ここまでくれば、嘗て渡辺照宏（この仏教学者〔東洋大学教授〕はそれこそ真面目<sup>まじめ</sup>一<sup>いっ</sup>方<sup>ぽう</sup>のル・リゴリスト<sup>le rigoriste</sup>である）が真宗信徒一般に突き付けた冷厳なる「現状批判。に対して、一応は返答し得たと言っただけではないか。謂うところの「現状批判。とは、渡辺照宏『日本の仏教』（一九五八年一月、岩波新書版）の「Ⅲ さまざまな流れ／アミダ信仰」という節<sup>セクション</sup>の最終二段落をさす。

浄土教の流行がわが国におよぼした影響は大きい。中でも浄土真宗は、親鸞自身の意図とは別に、思いがけない方面に影響した。自力の拒否、戒律の放棄は独善的な、閉ざされた教団を成長させた。前にも指摘したように、いわゆる自力の立場に立つ聖道門の人たちが社会事業に貢献しているのに、真宗の人々は最近までその方面に無関心であった。親鸞の非僧非俗の立場は出家教団の秩序を破壊したのみではなくて、在家信者の基本的義務さえもふみにじってしまった。仏教の在家信者の第一の義務は布施である。次には在家としての戒律を守ることである。布施と戒律とを放棄すれば、在家信者の資格がないことはインド以来の教団の歴史に明らかである。このようにして在家信者の資格さえも放棄した親鸞の教をもって〈在家仏教〉とよぶのはまったくの見当ちがいである。親鸞は彼自身の言ったように僧侶でもなければ在家でもない。

また一般に浄土教は現実逃避の傾向が強い。日本人が正面から現実の問題と取組むことを回避する態度を助長したのも、浄土教であった。したがって封建的勢力に協力し、社会の近代化を妨げた責任の一端もここにある。こういう点から考えても、浄土教は西欧における宗教改革とは正反對の役割を果たしたと言わなければならない。この末世的な新興宗教を「日本仏教の精華」とよぶような偏見が今でも一部では行なわれているが、そういうことをいうのは仏教の本質と実践的意義を知らないからである。浄土教の近代化はなお今後の問題であろう。

——上に掲げた渡辺照宏の日本浄土教批判および真宗門徒現状批判には、むしろヒステリックと評し得るくらいに厳正純粹なる《仏教史観》が貫かれてあるので、校注者などは、所詮は人間あつての宗教なのだからもうすこし寛容であつてもよいのではないかと反論したいくらいである。しかし、日蓮正宗入信以後の牧口常三郎の場合は、《仏教史観》ないし《仏教教理》に関するかぎり、誰にも負けないくらい厳正純粹であり亦た多少とも不寛容と見做されても仕方無い部分もあつたので、もしも、渡辺著書と出会ったと仮定したら、おそらく賛同の意を表したのではなかったかと想像される。しかも、若年時の（すなわち『人生地理学』執筆時の）牧口常三郎は、越後人に<sup>ふさわ</sup>相応しく（すなわち「真宗王国」と称される北陸四県人の大多数が然うであるごとく）蓮



如および『御文章』を引き合いに出して「風と宗教人」のテーゼを論じ、「すでに无常の風来りぬれば」うんぬんの一節に即して「唯だ夫れ『一陣の風』に動かされたる上人の胸中より湧出して靈句となりしものが、同一の風に動かされたる人心に更に感動を与ふればなり。」と結論づけている。視角を替えてみるならば、牧口の激烈なる人生探求の道程は、蓮如によって触発されて出発した情緒の次元から、スペンサー・ヘルバルト・カントの理性的＝主知主義的論理の次元を経て、最後に新カント学派・限界効用理論・知行合一的プラグマティズムなどを合流させながら遂に仏法の次元へと登攀高揚して行くプロセスだった、というふうに跡づけし得ようか。なんにしろ、牧口がわれわれの眼前に遺し置いたものは、偉大なる《普遍理性人》ないし《世界思想人》の軌跡であった。もし然く申して差し支えないとするならば、本補注および前補注がながながと蓮如上人の<sup>のこ</sup>ゝんと作品、の周辺を<sup>しょうようはいかい</sup>遡徘徊した筆もけっして無駄には終わらなかったということになる。

37 「御文章」（六五ページ、注15）吉川弘文館版『国史大辞典5・けーこほ』（一九八五年二月刊）に当該見出しを検索するに、「ごぶんしょう 御文章→御文（おふみ）」とあり、そこで、同じく『国史大辞典2・うーお』（一九八〇年七月刊）を繙かなければならないことになった。（<sup>ちな</sup>因みに、『角川日本史辞典』その他の国史辞典を窺いてみても、見出しに「おふみ」のほうが優先されているのが一般的なのだけれど、これは、殊更に「東本願寺派 [= 大谷派] の呼称のほうを重要視したうえでの処置というのではなしに、辞書 [= 事典] の編集上の通常システムに準拠した場合に然く<sup>しか</sup>処置するのが無難公平となると判断したために択んだものに過ぎなかったのではないかと臆測する。）

さて、『国史大辞典』掲載記事（笠原一男執筆）を以下に紹介する。

**おふみ 御文** 本願寺第八代法主蓮如の消息を大谷派（東）本願寺では御文という。本願寺派（西）ではこれを御文章（ごぶんしょう）と呼んでいる。蓮如は数多くの消息を書いているが、これらのうち、大永元年（一五二一）蓮如の孫円如が八十通を選んで五帖に編集したものが一般にいわれている御文である。これを帖内御文という。これにもれた蓮如の消息がのちに帖外御文として編集されている。したがって帖外御文の数は、今後蓮如の消息が新しく発見されるにつれて増加するといった性格のものである。禿氏祐祥編『蓮如上人御文全集』には帖外御文として百八十四通を収録している。御文は坊主・門徒の布教の虎の巻ともいえる性格をもっている。御文の内容はさまざまであるが、念仏の救いとはなにか、期待される念仏者とはどのような条件をそなえた者か、念仏者のまもるべき信仰や対社会的条件など多方面に及んでいる。なかでも、異端の念仏への批判、信心不純の批判を内容とするものが多い。現存する御文のうちで最も早期のものは寛正二年（一四六一）三月日付けで、近江の善立寺開基金森道西に与えたものである。それ以降明応七年（一四九八）十二月十五日の蓮如の死の前年までの御文が残されている。蓮如が、御文をつくるために払った努力は絶大なもので、この一通さえあれば誰でも正しい念仏の教えを他に説くことができるといった性格のものである。一般の人々に念仏の救いをわかりやすくするために、百のものを十に、十のものを一つに精選してまとめたのが御文であると蓮如はいつている。また、蓮如は、わがつくったものではあるが、実によくできていると、自画自讃している。御文によって蓮如の説いた真宗の教説はもちろん、異端の教説、信仰の実態、蓮如と政治権力、門徒の反体制的言動に対する蓮如の考え方など、まさに戦国時代の真宗に関するあらゆる問題を知ることができる。



帖内御文・帖外御文とも前記『蓮如上人御文全集』のほか稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』などに収める。

——学問的記述というか常識的見方というか、この笠原一男執筆の記事はまことに要領を得たもので、われわれとして何ひとつ付け加える必要は無い。だが、そうはいっても、蓮如崇拜者ないし浄土真宗信仰者の立場からすれば、斯様な記述＝記事では、却<sup>かえ</sup>って『御文』『御文章』について何ひとつ理解したことにはなり得ないではないかとの「不満の意」が提起されるかも知れない。最小限、いつ、どのような動機で、どのような状況下に書かれることが多かったか、という問いに答えている記述内容になっていないならば、満足しにくいのではないかとおもう。よく知られているように、蓮如が一四七一年（文明三年）に吉崎御坊を開くや諸国門徒の群集は<sup>りょうげん</sup>「療原の火」のごとき勢いで殺到し、蓮如はそれを制止しなければならなかった。ふたたび、天台宗など既成仏教勢力からの弾圧<sup>こうむ</sup>を蒙ることは必至だったし、同じ真宗のなかでも高田門徒などの圧迫もけっして過小評価することは出来なかったからである。蓮如は、なんとかして新しき真宗門徒に対する新しき指針を示さなければならないと考え、焦るに似た気持ちでいた。その間の経緯<sup>かん</sup>に関して、森龍吉の好著『蓮如』（一九七九年八月、講談社現代新書版）は、満足のゆく答案を示してくれている。「蓮如は内心に深いディレンマを感じはじめていた。このような危険なエネルギーなくしては当流の仏法も発展しないことを悉知<sup>しつち</sup>していたからだ。一日も早く、新しい真宗門徒の生活指針を示さねばならない。それにはまず龐大な群集とのコミュニケーションをどうするか、宗教儀礼をどう制定するか、それが精神的な統一と安定を支える焦眉<sup>しょうび</sup>の課題である。／蓮如は第一に、時々刻々にふくれあがる門徒大衆の教化には『御文』の制作がもっとも有効な方法だと考えた。最初の『御文』が近江門徒を対象として十年前にしたためられたことはすでにのべた。その後も折にふれて書かれたが、『真宗史料集成』第二巻（『蓮如とその教団』）によると、現在『御文』二百五十二通のうち、年次不明のもの六十二通をのぞき、明確なものを対象とすれば、吉崎以前にはわずか七通を数えるにすぎないが、吉崎時代四年間には八十四通に達する。これだけをみても、この時期に『御文』がいかに精力的に制作されたかがうかがえるであろう。／『御文』は鎌倉時代から盛んになった和文の法語形式を踏襲したものであったが、蓮如のばあいにはとくに門徒の定期的寄合＝講の法座を明確に意識して制作されている。それは文字の読める惣門徒の指導者である坊主・年老に、くりかえしくりかえし読みあげられることを予想して書かれ、一通の御文は伝達の輪を幾重にもひろげ、勸奨<sup>かんしょう</sup>の実をあげていくのである。一文不知<sup>いちもんふち</sup>の在家門徒でもいくたびも聴聞し、口ずさむあいだにおのずと暗誦され、在家勤行に定着して今日にいたった。／『御文』は、文明五年<sup>あきれんそう</sup>に安芸蓮崇によって蒐集されたのをはじめとして数多くの蒐集編成がおこなわれたが、第一〇世証<sup>しょうにょ</sup>如のころから、普遍性の強いものをえらんで五帖に編集し開板されるようになった。末寺門徒の数が等比級数的に増大する教団成長に対応するためであったが、それが日本人の底辺層に大きな宗教的・教育的役割を果たし、真宗的エートスを形成する原動力となったことはみのがすことができない。」（2—急展開の後半生、2—吉崎御坊の建立）[傍線個処は引用者に依る]。——以上の森龍吉の文章のおかげで、『御文』（『御文章』）が蓮如によ

って書かれた根本動機や、執筆時ならびにコミュニケーション空間の社会文化的条件が、いかに緊迫したものであったかという問題が解きほぐされたようにおもう。この叙述ならば、蓮如崇拜者ないし真宗信徒のひとびとをも十二分に「満足、せしむるであろう。

ところが、いっぽう、世の学問探究者のなかには蓮如および『御文』に対して「厳しい点数、しか付けられないひともし少なからず存在する。上掲の森龍吉の文章のなかでは、末寺門徒の激増に対応するために編集＝<sup>はんこう</sup>板行された『御文』が「日本人の底辺層に大きな宗教的・教育的役割を果たし、真宗的エトスを形成する原動力となったこと」を積極的＝肯定的に評価しているのに、同じ事柄について、戸頃重基『鎌倉仏教—親鸞と道元と日蓮—』（一九六七年四月、中公新書版）は全くあべこべに全面否定的評価をくだす。蓮如が神祇崇拜許容や世間仁義的妥協を勧める文明六年（一四七四年）ごろの『御文』について、斯く批判する。「しかし、どのような状況からいわれたにもせよ、雑行を公然と承認し、王法為本を主張したことは、組織者蓮如の思想ではあっても、開祖親鸞の信仰を発展させたものとはいえない。親鸞は、弟子をもつことも、寺院に生活することも拒んだ。しかし蓮如は、本寺→末寺→道場という中央集権的な寺院組織や、それに見合った門徒の、坊主・年老・長の縦割りの人間関係をつくった。／こうして蓮如は、親鸞の同朋同行思想をはじめ、悪人正機と呼ばれた貧しい底辺の人びとからも遠ざかっていった。そこには、一向一揆とはちがった立場や性格が現われていたのである。教団の基礎が固まり、それが大きくなれば、それを政治的に統制し、経済的に維持するためにも、中央・地方の有力者と、必然的に結びつかなければならない。それがまた布教の効果をあげる早道でもあった。しかしこのとき信仰は、ゆがめられるか失われるかのどちらかである。後世の本願寺は、念仏の行者親鸞よりも、組織者蓮如の遺産を継承していたのである。」（4 法灯のゆくえ／本願寺教団の末路）[同じく傍線は引用者]と。戸頃は、もし本願寺が親鸞からまちがいなく継承したものがあるとしたら妻帯と飲酒ぐらいだろう、真宗僧侶は愛欲を満足させ法脈と血脈との混同を平然とおこなって恥じない、との痛烈な批判まで付け加えずにはいない。これらの批判は、どれ一つをとっても、<sup>まとはず</sup>的外れのものは無いと言うべきである。

だが、そうなると、またまた真宗門徒の方々は<sup>かたがた</sup>「不満、を募らせてしまうに相違ない。——ここで、われわれとして、最善の策は純客観者の記述をもういちど尊重することではないだろうか。<sup>ノンセクテアリアン</sup>Nonsectarian の記述に、つまり真宗教団の門徒でもなければ他の仏教宗派に所属する信者でもないところの或る作家の記述に、われわれとして<sup>みみか</sup>耳藉すべきなのではないだろうか。

当面、純客観者の記述に<sup>めいじつとも</sup>名実俱に値いする作家の仕事として、辻善之助著『日本仏教史第六巻・中世篇之五』（一九五一年四月、岩波書店刊）を挙げるのが最も妥当な処方かとおもう。辻善之助（一八七七～一九五五）は東京大学教授の<sup>かたわ</sup>傍ら史料編纂所初代所長として貢献、戦前から日本学士院会員となり、第二次大戦後に文化勲章受賞者となった歴史学の泰斗である。『日本仏教史』全十巻は辻の論文を整理分類し集大成して体系を与えた大著だが、同じく戦後に集大成された大著に『日本文化史』全七巻・別録四巻（春秋社版）があり、両大著を読み<sup>くら</sup>較べてみると、読者にとって「眼から鱗が落ちる、というのか」「腑に落ちる、というのか」兎も角も翻然として迷

夢から醒まされ改めて真実に触れる事象の多いことに驚きを<sup>あらた</sup>鮮たにする。本注担当者は、以下の引用にみるごとく、蓮如『御文』に関する純客観的評価を辻善之助『日本仏教史第六卷』所説に求めているのだけれど、ほんとうは同時に『日本文化史Ⅳ・<sup>吉野室町時代</sup>安土桃山時代』（一九五〇年三月、春秋社刊）の必要部分をも併せ呈示しなければ、引用者の義務を果たしたことになるとおもう。だが、それも煩瑣<sup>はんさ</sup>と感じられる向きも多いかも知れないから、室町時代仏教の貴族化（禅宗、浄土宗、日蓮宗、いずれもこの傾向<sup>まめか</sup>を免れることは出来なかった）に関する辻所説のみを紹介しておくことにしよう。「本願寺についてもやはり成上りの様子が見え、下剋上して貴族化した様子が認められるのである。これは吉野時代の頃、覚如の時から既に貴族化の傾向があったのである。即ち、本願寺中心主義を立てて田舎の門徒達を賤めたために、関東地方に居た親鸞聖人の門弟子孫と衝突し、覚如の所へ田舎の門弟達から仕送りをしないので、経済的に非常に苦しんだことがある。（拙著『日本仏教史』中世篇之一参照）／蓮如になってからの真宗は頗る平民的になったが、なほ努めて武家に接近を図ってゐた跡が見える。これは固より宗勢を拡張する方便であらうが、なほ貴族的傾向があったことは否めない。蓮如の晩年になってからは、一向宗は朝廷の地下<sup>ちげ</sup>の仲間へ広がってゐたやうである。これはやがて堂上方<sup>たうしやう</sup>へ弘通の先駆である。蓮如の次の実如光兼の時には公卿へ接近の傾向が著しくなって来て、公家衆達との往復の頻繁であったことは、当時の公家衆達の日記に多く見えてゐる。／その次の代の証如光教の時になると、本願寺の貴族化は更に著しくなった。当時証如は脇門跡になりたいと望んだが許されなかった。本願寺が門跡に准ぜられたのはそれより後で、次代の顕如光佐の時、永祿二年（<sup>二五</sup>/<sub>五九</sub>）になって始めて許されたのである。かくのごとく証如光教の望むところは成功しなかったが、其頃から漸く貴族化する徴候が現れてゐる。／光教は又九条尚経<sup>ひさつね</sup>の猶子になりたいと望んだ。そのことを尚経より後奈良天皇へ申上げたところが、後奈良天皇は初めこれを御許しにならなかった。即て実隆公記に然るべからざるの由勅諭ありと見えてゐる。その記すところによると、後奈良天皇に近侍して忠勤をぬきでた三条西実隆の如きも、後奈良天皇の思召に賛成して、御許しにならぬ方がよろしいといふ意見であったのである。然しいろいろの事情から終に許さなければならぬことになった。そこで本願寺は九条家の養子同様になり、本願寺から礼物を贈つてゐることが実隆公記に見えてゐる。後奈良天皇が御許しにならなかったといふのは、其頃金銭を以て官位を売るといふ弊風が多くあったので、常にそれに御心を悩まし給ひ、皇室の尊厳を保ち公卿衆の品位を維持することに御努めになるといふ御趣意から出たことである。けれども証如は九条家へ頼んで遂に猶子となって、漸く貴族仲間へ入込んだ。」（第三十五章 室町時代平民文化の発達）。——なるほど、これほどに時間と費用とをたっぷり使つて最後に貴族階級への仲間入りに成功するプロセスをば、いま公平に観察し特徴づけてみるならば、歴代の本願寺法主がめざしていた方向が民衆救済に在ったなどとは、もはや、誰しも本気で左様<sup>さよう</sup>なことを口<sup>くち</sup>にし得ないはずである。

ただし、当面の論題に<sup>まと</sup>的を絞<sup>しぼ</sup>ることにして、本願寺第八代法主蓮如は百パーセント俗物宗教事業家でしかなかったか、また『御文』の作者蓮如に宗教思想家としての革命的独自性はゼロパーセントの比率しかなかったか、と問い直してみると、蓮如個人に関するかぎり、この僧侶を俗

物宗教家とのみ指弾し断罪することは必ずしも正しいとは言えない。また、『御文』を以て、親鸞思想を一步も二歩も押し進めて徹底化してみせ戦国乱世を生きる同時代人たちに「生きるよすが」を示した現実的叡知の書である、と評価し直すことも必ずしも不可能とは言えない。われわれ現代の学問研究者は（ひろく知識人は、と言い直すほうがよいが）、能うかぎり断定を避け裁きを慎む「公平無私の態度」を保持すべきである。真宗の教義が最優秀だったからのちのち最大の教勢を拡大したなんぞと言ってはならないこと勿論であるが、いっぽう、蓮如に宗教人としての知恵の高さ思想の奥深さ人格の勁健さが無かったなんぞと言ってはならない。すべては、在るべくして在ったのであり、成るべくして成った、と見るしか仕方無いとおもう。

それで、もういちど辻善之助『日本仏教史第六卷・中世篇之五』に立ち<sup>かえ</sup>復り、蓮如および『御文』に関する公平なる<sup>スケッチ</sup>粗描を獲得しておかなければならない。「第八章 吉野室町時代／第十二節 本願寺と一向一揆」はA5版二四〇ページを超える長大なる叙述だが、その半ば近くに至り、「蓮如以後真宗の繁盛したことの一因は、蓮如の子女の繁衍にある。蓮如には二十七子あつた。」「此等は諸国の寺に派遣せられ、本願寺の藩屏となり、その教網を張るに大なる勢力を成し、女子も亦その姻縁に依つて、本願寺と連繋を密にし、裏面より教勢拡張に与つて力あつたであらう」として、蓮如が真宗中興の祖と仰がれるようになった原因の第一に、子どもが二十七人にいた事実（辻は、これを生物学的事実とも宗族史的事実とも呼んでいないが）を挙げている。原因の第二としては、「次に蓮如が宗内を統一して、本願寺がその中心として立つに至つたこと、これが真宗繁盛の一因である。蓮如の時には、専修寺を除く外は、皆本願寺に帰属した。」という中央統制的布教政策を挙げている。第三のものとしては、「次に蓮如が官界の権勢又地方の豪族に結んだこと、これ亦真宗繁昌の一因であつた。」というふうに隔々にまで行き亘る即現実ポリシーの実行を挙げている。第四のものとして、「女人の往生極楽を説いたこと、これがまた真宗隆盛の一因であつた。」というふうに五障三従の罪深き存在とする仏教女性観を踏襲しつつもそれを<sup>さかて</sup>逆手に取って《女人正機》の救済理論にまで到達した考え方を挙げている。第五には、「民衆を基本として、その信仰団体を結成したこと、これが蓮如の成功した一因であつた。四講・六日講の事は、既に前に述べた。その民衆に対する態度も、つねに御同朋御同行主義であつた。」と指摘し、蓮如が「信仰の前には、貧富の差貴賤の別もない」と考えたこと、また「門徒を大切にしたこと」、そして「遠国から上洛したものには、鄭重なる饗応をして之を労ひ、苟も粗末なる待遇をした時には、その接伴の者は厳しく叱られた」という逸事を引き、さらに「仏法を弘め勸化する為めには、上臈ぶつてはならぬ、<sup>げす</sup>下主に近づかなければならぬと蓮如はその趣意を述べた。」と解説している。数多くの逸事逸話を引用しながら、辻善之助が描きたかった蓮如の宗教者像＝思想家像は、徹底的とも称すべき現実主義<sup>リアリズム</sup>と平民主義<sup>ポピュラリズム</sup>と民衆救済理念とによって貫かれる強靱なる<sup>スタチュー</sup>塑像であつたと言ってよい。理論だおれにならない、あくまで具体的かつ平明単純で、しかも人間的愛情に横溢する布教をめざすところに、おのずからにして『御文』の字句群が産みだされたのである。

以下、公平なるがゆえに説得力に満ちた辻善之助叙述に、直接に聞け。



この平民主義同朋主義は、如何ばかりその門徒を感激せしめたであらうか。かくて、この主義は時代の精神たる民衆本位主義と合致して、真宗繁盛の一大原因を成したのである。

平民主義を立するが為に、その説く所の形式も内容も極めて平易であり、簡明である。伝道は常に消息を以て行はれた。御一代聞書に、

御文ノコト、聖教ハヨミチカヘモアリ、コヽロエモユカストコロモアリ、御文ハヨミチカヘモアルマシキトオホセラセラフ、

読み易く、聞き易く、解し易きを以て旨としたのである。消息を以て伝道することは、古く日蓮にもその例あり、また他宗の例を引くまでもなく、親鸞にも御消息集・末燈鈔・血脈文集あり、蓮如も嘗て末燈鈔を書写したことがある。蓋し蓮如の消息伝道は宗祖親鸞に倣うたといふこともあるのであろう。かくて宗内に於ては、蓮如の消息を「御文」と称して、夙くより之を尊重し、之を所望するもの多く、或は座右に掲げて箴とし、或は会合の席に読誦した。<sup>(御一代聞書)</sup>蓮如自らも之を読誦して門徒に読み聞かせ、我が作つた文なれども殊勝に覺ゆるとて、その読誦を人々に勧めた。<sup>(空善日記・蓮如上人遺徳記・榮玄聞書)</sup>これ等の御文は、夙くより輯めて一部の書とせられた。それは下問蓮崇の手に成るものであつた。帖外御文（一ノ十三端書）に、

右斯文トモハ、文明第三之比ヨリ、同第五ノ秋ノ時分マデ、天性コヽロニウカムマヽ、何ノ分別モナク、連々ニ筆ヲソメヲキツル文トモナリ、サタメテ文体ノヲカシキコトモアリヌベシ、マタコトバナンドノツヽカヌコトモアルベシ、カタヽヽシカルベカラザルアヒダ、ソノシンシヤクヲナスツイヘドモ、スデニコノ一帖ノ料紙ヲコシラヘテ書写セシムルアヒタ、チカラナクマヅシルシヲモノナリ、<sup>(ツ脱カ)</sup>外見ノ義クレヽヽアルベカラズ、タゞ自然ノトキ、自要ハカリニ、コレヲソナヘラルベキモノナリ、  
于時文明第五九月廿三日、藤島郷ノ内林之郷超勝寺ニヲヒテ、コノ端書ヲ蓮崇所望ノアヒダ、同廿七日申ノ尅ニイタリテ、筆ヲソメヲハリヌ、<sup>(通)</sup>

とある。その後、御文を希望するもの益多く、その為めに門下への頒布に適せるものを選び、量に於てもある制限を設くるの必要を生じた。かくて円如（実如の嗣、早く没して世代に入らず）が、その八十通を選んで之を五帖に分ち編した。それが今一般に流布せる五帖御文である。

五帖の編次については、蓮如が諸人にかいて与へた文の中、類似の趣旨のものが少くないので、それ等の中より、文句の普遍的永久的なるを採り、地方的な一時的なものは之を省いたもののやうである。又編次に際して、字句を修正した跡が少からず見える。今北陸地方を始めとし、京都其他の地に蓮如自筆消息原本を蔵するものが多くある。それを五帖御文と比べて見るに、仮字遣を改め、真字を仮字にかへ、漢文を仮字交りに改めたものなどあり、又読むに調子のよきやうに改めたものもある。編次の順序としては、年紀のあるものはその次第に依り、年紀の明かでないものは、文句の類似に依つて分つた。五帖御文は、この後証如の時代に至り、天文六年（一五三七）に始めて開版せられた。五帖に収めたものの以外の文を輯めたものを、帖外御文といふ。すべて八十三通あり。寛永年中の編纂にかゝり、その後上木せられた。御文の異本としては、摂津名塩教行寺本には二百四十六通を収め、又越後高田本誓寺本「十帖御文」には百八通を収む。この外、尚これ等に収められない自筆消息の伝はるものが若干通ある。大正十一年禿氏祐祥氏の編輯出版にかゝる<sup>校註</sup>蓮如上人御文全集には、帖外御文として計百八十六通を収めて居る。之を五帖御文の八十通と合せば、二百六十六通となる。<sup>(禿氏祐祥氏蓮如上人御文全集・大谷学報第十卷ノ四箱葉昌丸氏蓮如上人御文の蒐集及び五帖御文編輯に就いて参照)</sup>

これ等「御文」に於て、蓮如の説く所が如何に民衆本位であつたかは、左に掲ぐる二通の消息を見て、その大概を察することができよう。

マヅ当流ノ安心ノヲモムキハ、アナガチニワガコヽロノワロキヲモヽマタ妄念妄執ノコヽロノヲコロヲモヽトゞメヨトイフニモアラズ、タゞアキナヒヲモシヽ奉公ヲモセヨヽ獵スナドリヲモセヨヽカヽルアサマシキ罪業ニノミヽ朝夕マトヒヌル我等コトキノイタヅラモノヲヽタスケントチカヒマシマス弥陀如来ノ本願ニテマシマスゾトヽフカク信ジテヽ一心ニフタコヽロナク弥陀一仏ノ悲願ニスガリテヽタスケマシマセトオモフコヽロノ一念ノ信マコトナレバヽカナラズ如来ノ御タスケニアヅカルモノナリヽコノウヘニハヽナニトコヽロエテ念仏マウスベキゾナレバヽ往生ハイマノ信力ニヨリテヽ御タス



ケアリツルカタジケナキ御恩報謝ノタメニ、ワガイノチアランカギリハ、報謝ノタメトオモヒテ、念  
仏マウスベキナリ、コレヲ当流ノ安心決定シタル信心ノ行者トハマウスベキナリ、アナカシ  
コ、、、、、

文明三年十二月十八日

(御文三)

シノウコウシヤウ  
侍能工商之事

- 一、奉公宮仕ヲシ、弓箭ヲ帶シテ、主命ノタメニ身命ヲオシマズ、
- 二、又耕作ニ身ヲマカセ、スキクワヲヒサゲテ、大地ヲホリウゴカシテ、身ニチカラヲイレテ、ホリツ  
クリヲ本トシテ、身命ヲツグ、
- 三、或ハ芸能ヲタシナミテ、人ヲタラシ、狂言綺語ヲ本トシテ、浮世ヲワタルタグヒノミナリ、
- 四、朝夕ハ商ニ心ヲカケ、或ハ難海ノ波ノ上ニウカビ、ヲソロシキ難波ニアヘルコトヲカヘリミズ、  
カ、ル身ナレドモ、弥陀如来ノ本願ノフシギハ、諸仏ノ本願ニスグレテ、我ラマヨヒノ凡夫ヲタスケ  
ントイフ大願ヲヲコシテ、三世十方ノ諸仏ニステラレタル悪人女人ヲスクヒマシマスハ、タゞ阿弥陀  
如来バカリナリ、コレヲタフトキヌトモオモハズシテ、朝夕ハ悪業煩惱ニノミマドハレテ、一スデニ  
弥陀ヲタノム心ノナキハ、アサマシキヌニハアラズヤ。フカクツ、シムベシ、アナカシコ、、、、、  
(帖外御文  
五ノ十二)

——辻善之助<sup>したが</sup>叙述に違いつつ<sup>かよう</sup>斯様に追尋してくると、もはや、蓮如はひとりの偉大なる「天  
才」だったとしか他に呼びようがない。宗派だとか教理だとかの垣根を超えて然く認めざるを得  
ない。そして、若き牧口常三郎は、みずからの幼少年期を過ごした越後荒浜村の社会文化環  
境の一部要素のなかに真宗的因子の存在することを客観的に認知していたこととおもう。だから  
こそ、この『人生地理学』第十九章気候、第四節風と人生のセクションのなかで言及せざるを得  
なかった。しかし、思想家牧口常三郎が誕生し確立される時期＝段階では、不可避免的に、蓮如お  
よび『御文章』に対する考え方に変化が来ていた。

39 晴雨計（六六ページ、注1）現代の日本語では「晴雨計」の呼称よりもむしろ「バロメー  
ター」の名辞 term のほうが多く用いられることは、手近にある国語辞典に当たって<sup>けみ</sup>関するまで  
もなく、誰でも承知しているとおりである。岩波書店『広辞苑・第四版』をひらくと、「せいー  
う【晴雨】晴天と雨天。はれとあめ。『一にかかわらず』――ぎ【晴雨儀】晴雨計の旧称。――  
けい【晴雨計】気象観測用の気圧計。バロメーター。」とみえる。そこで、バロメーターのほう  
に目を転ずると、「バロメーター【barometer】①気圧計。晴雨計。②転じて、物事の状態・程  
度を知るための目安となるもの。指標。『体重は健康の一』」とある。ついでに引いておくと、  
「きーあつ【気圧】」の親項目（＝見出し語）のもとに、追込項目（＝派生熟字）として「一・け  
い【気圧計】気圧を測る器械。水銀気圧計・アネロイド気圧計など。晴雨計。バロメーター。」  
がみえる。なんにしても、われわれが日常頻繁に使う語は「バロメーター」のほうであり、たま  
たま話題が天気や気象のことに及んだときに限って「気圧計」の語を用いはするけれど、すくなく  
とも「晴雨計」の語を<sup>くち</sup>口の端<sup>は</sup>に乗せる機会は殆ど皆無だと言ってよいのではなかろうか。しか  
し、明治年代半ばの気象学界および地理学界にあっては（明治二十年に気象台測候所条令および  
同施行細則が出され、東京気象台は中央気象台に改められ、この年を機に府県営の地方測候所が

四十箇處ほど設置されることとなった。翌明治二十一年には中央气象台から東京地方の天気予報が発表され、二十八年にはこの中央气象台は文部省の所管に移される、といった足跡を辿る)、当然ながら、「晴雨計」のタームのほうが、ものに即して(つまり、指標とか目安とか徴候とかの抽象概念としてではなしにの意だが)使用されていたという客観的事実を、見誤らないようにしたい。序でに触れておくと、文字面での「晴雨計」ならば、明治零年代に刊行された小学校・中学校レベルの物理学教科書の数ページに挿絵入りで記載されてあったのである。それが今やものに即して理解される段階に到達したことを見誤るな、と言いたかったまでである。

そこで、その明治年代半ばごろの専門用語 terminology である「晴雨計」の概念および概念内容を確かめておく段どりに入らなければならない。さいわい、校注者の手許に中川源三郎著『天気予報論』(一九〇〇年八月、裳華書房刊)という題名の、今日となつては稀観本の部類に属する一冊の書物がある。かりに稀観本と呼んではみたが、もともとこの書物は《札幌農学校学芸会蔵版》シリーズないし《高等札幌叢書》シリーズとして継続出版された(そのなかには新渡戸稲造『農業本論』、松村松年『日本昆虫学』、堀正太郎『農作物生理学』、大脇正諄『最近米穀論』など当時のベストセラーも含まれている)ものであるから、一概に珍本扱いするのは必ずしも正しくないかも知れない。だが、現実問題として、こんにち当該書籍を入手することは殆ど全く不可能になっているので、一応のところは“rare books”の範疇に入れて差し支えなさかとおもう。こんにち入手困難になっていようといまいとにかかわらず、牧口『人生地理学』第二編第十九章気候のチャプターの最末尾に据えられた「参考要書」のリストをみるに、はっきりと「▲中川源三郎氏『天気予報論』」を閲覧引用したことが証示されてあるので、われわれとしては、ぜひとも当該参考要書を詳細に検討し直してみる必要がある。

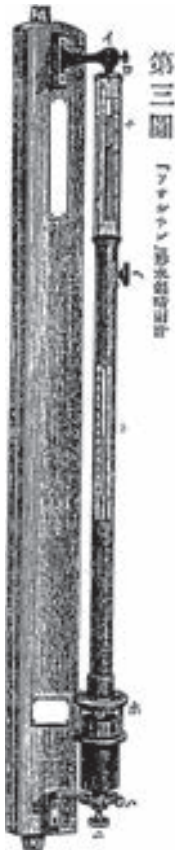
著者中川源三郎は、当時、中央气象台技手の職責に在り、気象学および農業気象学の学問領域では日本で最も進んだ研究業績を持つ新進気鋭の学徒であった。同書巻頭に近い「第一編 予論／第一章 天気及天気の要素／第一節 大気の温度」の記述を承けた「第二節 大気の圧力及運動」のセクションに入って、中川はこう述べる。――

## 第二節 大気の圧力及運動

地上の物体は総て重量を有せざるなく空気も亦重量あるか為め多少の圧力を生ずへし此圧力は下層に大にして上層に小なり蓋し上層の空気は下層に其重さを負担せしむるを以てなり然れども寒冷なる空気は温暖なるものよりも重く且つ濃密なるか故に其圧力は地平面と雖も寒暖相同しからざるときは強弱の差を生じ随て各地方常に等圧なる能はず是に於てか空気は圧力強き方より弱き方に向て流動を起すこと水の低きに就くか如し所謂風とは即ち是の謂なり

天気の要素に数種あれとも大気の流動即ち風は天気の変化を起す主働者にして風あるか為め各要素は混乱錯綜し種々の天気模様を生ずるものと知らるゝなり然るに猶ほこゝに最も密接なる関係を有するものあり空気の圧力即ち之なり気圧は単に天気の要素として採用すへからすと雖も空気の運動を説き天気との関係を究むるには甚だ緊要なるものなり

●●●  
気圧 空気に圧力あることを証せんと欲せば長さ三尺許の玻璃管を取り其一端を密閉し之に水銀を充て更に水銀を盛りたる盤内に倒立せよ然るときは管内の水銀は盤面より凡そ七百六十<sup>ミリメートル</sup>耗(二尺五寸)の高さに止るを見るへし之れ水銀柱は外気即ち盤面上に働ける空気の圧力によりて支持せらるゝか故な



り若し試に外部の圧力を減せんか管中の水銀下り増せは又昇るを見るへし気圧計は此原理に基づき製作したるものにして気圧を示すに尺度を用ゆるものは此水銀柱の高さを示すものなり普通称ふる晴雨計とは即ち此器にして偶々天気の変化と其昇降を同ふすることあればかく名けたるなり今左に晴雨計の構造、種類、及観測の方法に就て述へん

晴雨計は其用途甚だ広大なるか為め其種類頗る多く近來続々として簡便なる新器を製作し或は精密なる自記機を見るへしと雖も氣象観測<sup>(マテ)</sup>には水銀晴雨計を良しとす何んとなれば金属製の如きは構造より生ずる誤差多く又之か更正を施すこと甚だ困難なればなり第三図は当今専ら使用する「フォルチン」形水銀晴雨計を示すものにして其構造は前述せし如く水銀を満てたる玻璃管を水銀槽中に倒入し玻璃管は黄銅の筒を以て装ひ其上部は前後両面を開放して水銀の高さを測るに便宜ならしめ管の下部は水銀槽中に函入し其槽の上部は玻璃管を附して水銀面を整理するに便ならしむ其装置は第三図に示す如く一個の木板に釣釘（イ）を以て管環（ロ）を懸け下部には三個の螺旋（ハ）を以て器の動揺を留め以て水銀管を垂直の位置に保たしむ

今此器を用ひて空氣の圧力を験せんとするには先づ附着寒暖計（ト）の示度を読み取り（此温度を以て水銀の収縮膨脹を定むるに在り）然る後徐ろに螺旋（ニ）を廻転し槽内の水銀面をして象牙針端（ホ）と密接せしめ以て水銀面を一定（零点）の位置にあらしむへし之を水銀面の整理と云ふ此整理を為し終らは管測の螺旋（ヘ）を廻転し度畫標（チ）を上下して水銀面の上端を正しく標点に切触せしめ其管側に刻める度畫線と度標点と合一したる所を採て晴雨計の度となす

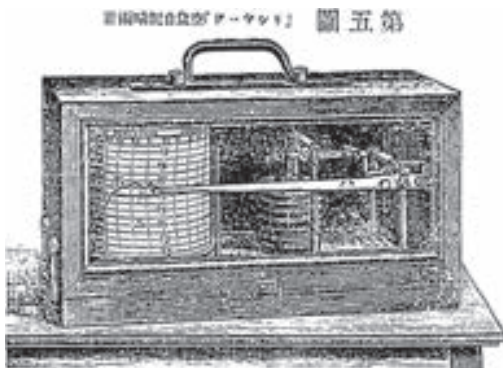
又水銀を用ひす金属を以て製したるものあり之を空盒晴雨計と名く其使用前器に比すれば頗る輕便なるのみならず携帯に便利なれば普通使用するもの多し此器は第四図に示す如く普通時計形となし盤面に度目を刻み針頭に廻旋により氣圧の強弱を示すの仕懸なり即ち其内部には空氣を除去したる円空圈ありて其上端を發



第四圖 空盒晴雨計

条板に結着し此曲板の伸縮は指針を廻轉せしめ外部の壓力増減に従ひて此圈の収縮膨脹を示針に伝へしむるに在り図中の中央にある黒指針は其示度を表し白針は前に示したる度を見分くる為め設けたるものにして中央の螺旋により自在に転廻せしむるを得べし又此理を応用して自記せしむるの装置に作りたるもの即ち「リシヤード」空盒自記晴雨計なり此器械は観測の勞を省くのみならず時々の変化は座ながら知り得ることを以て更に便利なり然れども前に言へる如く到底精確なるを保し難きを以て常に水銀晴雨計と比較更正するの勞を採るべきなり

第五図は空盒自記晴雨計の構造を示すものにして箱内に重環空



第五圖 空盒自記晴雨計

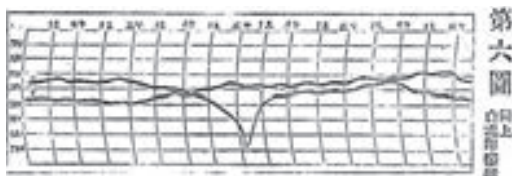
虚室（イ）ありて環内は空氣を除去し外部空氣の壓力によつて之を抑へ其上端は槓杆（ロ）の一端に結着し其他端は之を指針（ハ）に連結す今若し氣圧増すことあらんか空環収縮し槓杆の左端を引き付くるを以て右端は上昇し之を指針に伝へて其變りを膨大せしめ示針は氣圧の增高せるを示す之に反して氣圧減せんが空環は増脹するを以て槓杆左端の向上により指針下向して其度の低さを示す而して箱内の左側には別に廻轉円鑄（ニ）ありて度畫紙を巻き付け其内部は時計仕懸を以て円鑄

自ら廻転し指針の尖端に飽蓄せしめたる墨汁によりて断へず其昇降を自記し各時刻に於ける気圧の増減は曲線（ホ）の如く引畫するなり

今此晴雨計を以て断へず観測に就事し若くは自記によりて描きたる度書紙を採りて之を檢するに其変化は常に同じからずと雖も先つ二様に區別するを得べし定規及不定規変化是なり

定規変化には一日中及一年中の二あり一日中の変化は二回の浮沈ありて甲は午前十時前後に最も高く午後三時前後に最も低く乙は午後十時前後に高度を示し午前二時頃低度を示す此変化は地方と季節によりて多少等しからず概ね熱帯地方に大にして極地方に至るに随ひ次第に小となり又冬季に大に夏季に小なるを普通とす而して一年中の変化は日のものよりも更に大にして夏に低く冬に高しこは前に示す如く温度の高低に従ふて変するものなるや明なり

第六図は此実例として東京に於て測りたる自記晴雨計の度書紙一葉を表示したるものにして其曲線（イ）は概ね一日中の変化を現はし（明治三十三年三月三日より九日に至る）他の曲線（ロ）は定規の変化にあらざる劇変を示す（明治三十二年十月七日）即ち此図によりて見るも其変化の一層大なるあり又其前後に少しも定規の変化なきか如く更に不規則なることあり此変化たる時と所によりて著しき不同あるものなれば素より決定し難しと雖も其大変化は暴風雨の時に起り定時の変化は天候の平穩なるを知る故に気圧より天氣を察知し得るとは之を謂へるなり而して又此等の変化は各地方に於て観測したる晴雨計の度を地図上に記入すれば更に其模様を窺ふを得べし、かくして或る一定時刻に晴雨計の示度を記入したるものは気圧の配布を明示するに足るべく一目して其何れに高きか低きかを知るを得べし此の気圧の同等なる場所を連結したる線を名けて同圧線と云ふ、この同圧線の形状変化こそ天氣を究むるに重要なものなれば後章に於て精しく説くべし



中川記述に見える「水銀晴雨計」および「<sup>くうごう</sup>空盒晴雨計」「空盒自記晴雨計」は、現在にあってもの（＝器械それ自身）として使用されているし、また考<sup>え</sup>か<sup>た</sup>（＝学問的原理）として支持踏襲されている。それゆえ、中川記述のままに一字一句の修正補訂を加えずとも一向に差し支えないわけであるが、校注者の立場からすれば、やはり、一九九〇年代の地理学ないし気象学の視点からの言及をおこなう義務をおぼえる。なにしろ、われわれはエレクトロニクス時代 electronic age に生まれ合わせているのだから。

水銀晴雨計ないし水銀気圧計に関する最も新しい辞典記事としては、二宮書店版『気候学・気象学辞典』（一九八五年十月刊）所載のものを引くのが適切であろうと思われる。たまたま<sup>ヘッドワード</sup>見出し語が隣り合わせになっていたので、「水銀自記気圧計」のほうの記事をも引いておくことにする。――

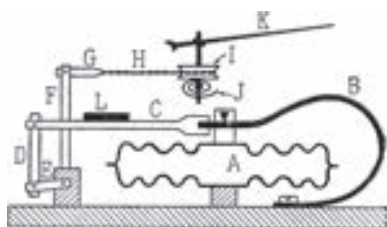
水銀気圧計 (E) mercury barometer (G) Quecksilberthermometer (F) baromètre à mercure  
ガラス管内の水銀柱の高さにより気圧を測る器械。地上の気圧観測用の測器として広く用いられているものに、フォルトン水銀気圧計がある。原理的には水銀をみたし一端を閉じたガラス管を水銀槽中に倒立させたもので、そのときの水銀柱の高さが気圧をしめす。山岳用水銀気圧計はガラス管の内径を7mmぐらゐに細くし、また気圧目盛の範囲を広げ低圧まで測れるようにしてある。ステーション型水銀気圧計はフォルトン型のように水銀面を上下する必要がなく、水銀槽が定容積である。また、マリ



ン水銀気圧計は、水銀の振動を減衰するよう主管の一部をせばめ、船が動揺しても器械が傾かないよう、特別にくふうした架にとりつけ使用する。（鹿野 到）

水銀自記気圧計 (E) mercury barograph (G) Quecksilberbarograph (F) barographe à mercure 水銀気圧計のしめす値を隔測自記させて気圧を測る器械。水銀気圧計は、常時一定温度（20℃、30℃または40℃）に保つような恒温槽に入れ、外温の影響を少なくする。フォルタン水銀気圧計の水銀管に炭素線を封入し、気圧の変動による水銀面の上下を電気抵抗値の変化に変え、気圧出力を自動平衡記録計で連続記録させる。このほか、サイホン型水銀気圧計の一方の水銀面上に鉄製の浮子（うき）を浮かせ、気圧の変動に応じた浮子の上下を電氣的に検出、拡大し、自記記録計上に記録させる器械もある。（鹿野 到）

つぎに、「空盒晴雨計」は、現在では「アネロイド晴雨〔気圧〕計」「アネロイド型気圧計」と呼称する。aneroidの語原は、液体を用いない、すなわち水銀不使用の義。そういえば、空盒晴雨計の「盒」の原義は、ふたもの、みとふたと合わせて閉じる容器の意であり、器械内部に密閉した空室を装置するゆえにこの語を用いたのである。さて、その「アネロイド気圧計」に関しては、最もわかり易く解説した記事が東京堂版『増補・気象の事典』（一九六四年三月刊）に見出せるので、それを引く。――



アネロイド気圧計

アネロイドきあつけい ― 気圧計 [Aneroid barometer] 気圧計の一種で空ごう気圧計ともいう。水銀気圧計に比べて小型軽量で取扱いにはるかに容易である。図において(A)は空ごうといわれる円形の空室で金属の薄板で作られ、その表面は容易に伸縮できるように同心円状のひだがついている。空ごうの内部は真空に近くしてあるから、気圧はこれを圧縮するように作用するが、空ごう自身およびバネ(B)の弾力とつり合った状態にある。気圧が変化すればこのつり合は破れて空ごうは伸びまたは縮

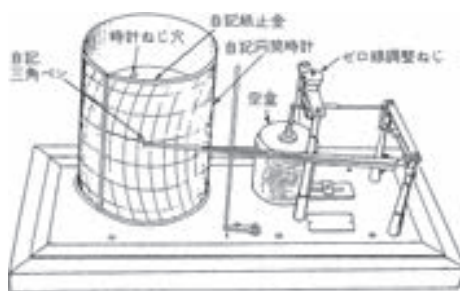
むから空ごうの上部は上または下へ動く。この動きはテコ仕掛の拡大機構C、D、E、FによってGに付いているくさりHを引くかまたは押すかする。Hはその他端が小さな溝車(I)に止めてあって、ヒゲゼンマイ(J)の作用で少し捲き込まれているから、結局空ごうの伸縮は溝車(I)をまわすことになり、それと同心の指針(K)は気圧に応じて動くことになる。所で空ごう自身およびバネの弾力は温度によって変るため、温度が変化すれば、あたかも気圧が変ったかのように指針の位置がずれて誤差を生ずる。このため、空ごうの内部に少し空気を残したり、金属棒(C)にそれとは違った金属の小片(L)を張りつけたりして誤差の軽減が計られている。LはCと共にバイメタルを形成して、温度が変ればCが曲り、ちょうど空ごうの伸縮によるCの動きを打ち消すように作用するのである。水銀気圧計のように重力の影響を受けることがないのはアネロイド気圧計の大きな特長である。従来型のアネロイド気圧計には色々の欠点があつて精度の高いものは得られなかったが、近年非常に改良されて精密級 Precision type と称するものが作られ、精密な観測にも次第に用いられていく傾向となった。

(渡辺貫太郎)

――右の記事に接するならば、<sup>こんにち</sup>今日通用するところの「アネロイド気圧計」ないし「アネロイド晴雨計」に関する概略的知識を容易に入手し得る。せっかく<sup>ここ</sup>茲まで<sup>ろう</sup>確かめる<sup>つづ</sup>労を竭したのでから、中川源三郎『天気予報論』の所謂「此理を応用して自記せしむる<sup>いわゆる</sup>の装置に作りたるもの即ち

『リシヤード』空盒自記晴雨計なり此器械は観測の労を省くのみならず時々の変化は座ながら知り得ることを以て更に便利なり」の器械についても知っておこう。「水銀自記気圧計」に関する記事の場合にも典拠に仰いだ二宮書店版『気候学・気象学辞典』（吉野正敏・浅井富雄・河村武・設楽寛・新田尚・前島郁雄編集）から必要項目を摘出することにするが、この処方をもんだ理由は明治三十三年八月刊の中川著書の記述および図版と比較対照して頂きたかったからである。もちろん現代のほうが進歩してはいるけれど、明治中期なりに相当程度まで先進科学技術導入に成功し<sup>おお</sup>畢せていなくもなかった事実を明らかにしたかったためである。そして、その先進科学技術導入の学問的文脈の中でこそわが「若き牧口、は眉を輝かせつつ『人生地理学』の筆を進めていたのであった。

アネロイド型自記気圧計 (E) aneroid barograph (G) Aneroidbarograph (F) barographe aneroid 感部に特別に加工した空盒(くうごう)を用いて気圧の変化を自記する器械。現在広く用いられている自記気圧計は、洋白、リン青銅などで作った空盒を数枚重ねるか、その内部を連結したベローズを用い、その動きをてこを応用拡大してペン先に伝え、これを時計じかけで回転する円筒上に記録させる。自記紙からは、気圧が0.1 mb単位で読みとれる。温度変化の少ない部屋に設置しておけば、重力補正も温度補正もしなくてよい。



(鹿野 到)

——あるいは、ひとによっては「無くもがな、の贅注<sup>ぜいちゅう</sup>を施したように見做<sup>みな</sup>す向きもあるかも知れないが、本補注担当者は、牧口原典のもう二ページすすんだ「第六節 風の種類と人生」のセクションの第二段落（本巻六五ページ、第八行以下）に風の種類七種の専門用語<sup>ターミノロジー</sup>を提示するに先だち「是れ本邦各測候所に於て適用する名称なりといふ。」と態々<sup>わざわざ</sup>断わり書きまで附記している事実<sup>が</sup>に突き当たり、該事実の意味するところに想到せずにはいられなかったのである。「若き牧口、は、必ずや中川源三郎『天気予報論』の清新なる記述一字々々に食<sup>く</sup>い入るごとく読み耽<sup>ふけ</sup>り且つその内容テーマひとつひとつに肉薄<sup>にくはく</sup>していったに違いない。

40 風は先づ其速度によりて左の七種に區別せらる、是れ本邦各測候所に於て適用する名称なりといふ（六六ページ、注3）脚注に記したとおり、現在では、牧口が「是れ本邦各測候所に於て適用する名称なりといふ」として紹介＝引用している七分法は、すでに使われなくなっており、代わって、ビューフォート風力階級表に拠る十七分類法が用いられるように変わってしまった。脚注のほうでは詳述する余白が無かったので、改めて補説せねばならないが、まず、あらかじめ「風速」と「風力」との相違を知っておく必要がある。和達清夫監修『増補・気象の事典』（一九六四年三月、東京堂出版刊）を準<sup>なぞ</sup>りつつ両者を比較することにしよう。

m/sec	ノット	Km/hr
1	1.944	3.600
0.514	1	1.852
0.278	0.540	1

**ふうそく 風速** [Wind speed] 単位時間に空気が移動した距離を風速 (m/sec) という。風速の単位として「ノット」kts あるいは毎時 (km/hr) を用いることもある。各単位の換算率は表の通りである。m/sec を kts に直すには 1.944 を掛る。例えば、10 m/sec は  $10 \times 1.944 = 19.44$  kts である。風速は時々刻々変動するもの（風の項目を見よ）で、気象で単に風速といえは平均風速のことである。

地面付近では、風速は地物の影響をうけ高さによって著しく異なるので、地上観測では広い平坦地で地上 10 m における値を測ることを標準としている。風速は通常ロビンソン風速計を用いて観測時前 10 分間の平均をとる。風速計のないところでは、ビューフォート風力階級の表を参考にして目測する。高層観測では、パイロット観測、レーウィンによって風速を測る。 (清水逸郎)

いっぽう、風力のほうは――

**ふうりょく 風力** [Wind force] 風の強さを示すために定められた数。風の強さは風速によって正確に知ることができるが、風速計のないところで目測するために、風速の程度によって段階に分け、最も風速の小さい段階の風力を 0 とし、順次に 1、2、3、……として風力の階級が作られている。各風力には、それぞれによって起される陸上あるいは海上の典型的な状態の解説がつけられているので、経験のある観測者は相当正確に風力を目測することができる。現在使用されている風力はビューフォート風力階級によるものである。昔はこれと別に陸上用として七段階の風力階級があったが現在は使用されていない。 (清水逸郎)

——これで漸く<sup>ようや</sup>わかったが、「風速」という概念は、一定時間内に空気の移動した距離をさす、言い換えれば、空気が移動した経路の長さ<sup>もくし</sup>と移動に要した時間との比をさす。ところが、「風力」のほうの概念は、風の吹く強さを<sup>もくし</sup>目視（人間の眼にみえる風のありさまをいう）によって分類したものをさし、ふつう風力階級によって分ける。そこで、二宮書店版『気候学・気象学事典』所載の「風力」の見出し語<sup>ヘッドワード</sup>では、さらに数歩をすすめて、つぎのように単純化してしまう。「風力 (E) Wind force (G) Windstark (F) force du vent 風力階級の各階級番号。0 から 12 まで 13 階級で表されている。または風が物体にあたえる力をいうこともある（風力発電のように。）」と。現代日本の学問水準を指し示していると考えられる幾つかの代表的な地理学事典、すなわち古今書院『新版地学辞典・I／地球物理学・資源工学・土木地質学・気候学』（一九七〇年一月刊）、大明堂版『最新地理学辞典』（一九七九年十月刊）、平凡社版『地学事典・増補改訂版』（一九八一年三月刊）などにおいては「風力」という見出し語すら収載されていない（ただし、「風力計」や「風力階級」という見出し語ならば載っている）事実の意味するところを、われわれとして、よくよく勘考熟慮するのが望ましい。

さて、ここで特に注意すべきは、前掲『増補・気象の事典』所載の「風力」の記事の末尾に「現在使用されている風力はビューフォート風力階級によるものである。昔はこれと別に陸上用として七段階の風力階級があったが現在は使用されていない。」と見える個処である。まず前者「ビューフォート風力階級」のほうを極めておかねばならないが、この概念＝術語は、同一事典

に見出し語<sup>ヘッドワード</sup>が載っており、「ビューフォートふうりよくかいきゅう ― 風力階級 [Beaufort wind scale] 英国のビューフォートが1805年に提唱した風力階級。はじめは海上の風力を示すためのものであったが、後に陸上の状態も定められて、現在では海陸共に使用されている。これは国際的に認められている風力階級である。わが国ではこれを気象庁風力階級表と名づけて使用している。(\*\*\* 頁のビューフォート風力階級表参照)」とあって、べつに全ページ大の表<sup>だい テーブル</sup>が併載されている。本補注も、その表を収載することとした。ただし、東京堂版同事典のものを丸写し<sup>まるうつし</sup>にして用を済ませず、校注者なりに若干の増補修正を施す処置を採ってあることをお断わり<sup>こと</sup>しておかねばならない。

気 象 風 力 階 級 表 (ビューフォート 風力階級表)

風力	名称	地上10mにおける相当風速 m/sec	相 当 す る 状 態		波の高さ	
			陸 上	海 上	平均	最大
0	平穏	0～0.2	静穏。煙はまっすぐに上がる	海面は鏡のようである。		
1	至軽風	0.3～1.5	風向は、煙のなびき方でわかるが、風向計ではわからない。	鱗のようなさざ波ができるが、波がしらに泡はない。	0.1	0.1
2	軽風	1.6～3.3	顔に風を感じる。木の葉が動く。風向計も動き出す。	小さいさざ波が明らかに認められる。波長は短い。波がしらはなめらかにみえ、砕けてはいない。	0.2	0.3
3	軟風	3.4～5.4	木の葉や細い小枝が絶えず動く。軽い旗が開く。	大きいさざ波ができる。波がしらが砕けはじめる。泡はガラスのようにみえる。ところどころに白波が現れることがある。	0.6	1.0
4	和風	5.5～7.9	砂はこりが立ち、紙片が舞い上がる。小枝が動く。	小さい波ができる。波長はやや長い。白波がかなり多くなる。	1.0	1.5
5	疾風	8.0～10.7	葉のある灌木が揺れはじめ、湖沼の水面に、波がしらが立つ。	中ぐらいの波ができる。波長はずっと長くなる。白波がたくさん現われる(しぶきがでることもある)。	2.0	2.5
6	雄風	10.8～13.8	大枝が動く。電線が鳴る。傘はさしにくい。	大きい波ができはじめる。波がしらが白く泡立つ範囲が、さらに広くなる(しぶきのことが多い)。	3.0	4.0
7	強風	13.9～17.1	樹木全体が揺れる。風に向かつては歩きにくい。	海は盛り上がり、砕けた波から立った白い泡は、筋を引いて風下に吹き流される。	4.0	5.5
8	疾強風	17.2～20.7	小枝が折れて飛ぶ。風に向かつては歩けない。	波長の長い、やや小さい大波になる。波がしらの端は砕けてしぶきとなりはじめる。泡は、はっきりした筋を引いて風下に吹き流される。	5.5	7.5



9	大強風	20.8～24.4	人家には軽い被害がある（煙突が倒れ、瓦がはがれる）。	大波になる。泡は、濃い筋を引いて風下に吹き流される。波がしらはのめり、崩れ落ち、逆巻きはじめる。しぶきのために視程は短くなる。	7.0 10.0
10	全強風	24.5～28.4	内陸ではあまり起こらない。樹木が根こそぎになる。建物には被害が多い。	波がしらが高くのしかかるような非常な大波になる。大きなかたまりとなった泡は、濃い白色の筋を引いて風下に吹き流される。海面は全体が白く見える。波の崩れ方は激しく、衝撃的になる。視程は短くなる。	9.0 12.5
11	暴風	28.5～32.6	めったに起こらない。広い範囲に被害がある。	山のように高い大波になる（中小船舶は、一時波の陰にかくれてみえなくなることもある）。海面は、風下に吹き流された長い白色の泡のかたまりで完全に覆われる。いたるところで波がしらの端がふきとばされて水けむりとなる。視程は短くなる。	11.0 16.0
12	台風	32.7～36.9	———	空中に、泡としぶきが充満する。海面は、吹きとぶしぶきのために完全に白くなる。視程は著しく短くなる。	14.0
13		37.0～41.4	———	———	
14		41.5～46.1	———	———	
15		46.2～50.9	———	———	
16		51.0～56.0	———	———	
17		56.1～61.2	———	———	

後者「昔は……陸上用として七段階の風力階級があったが現在は使用されていない」と記述されてある、その七階級の風力階級こそ、まさしく、牧口『人生地理学』が「是れ本邦各測候所に於て適用する名称なりといふ」と書いて提示する論題の中身でなければならない。そして、校注者の能力範囲内で追跡するかぎり、<sup>8</sup>若き牧口、が「七種の区別」と呼んで採択している分類表は、本補注 39 において紹介した中川源三郎『天気予報論』（一九〇〇年八月、裳華書房刊）に準拠したものと推定するのが最も無理のない処置と考えられる。以下、同書第一編 予論／第一章 天気及天気の要素／第二節 大気の圧力及運動、のセクションから必要個処を引いておく。文脈的には「気圧」（前補注 39 参看）に続く文章であることを付記しておかねばならない。

・ 風 空気の運動は気圧の高所より低所に流る、現象に外ならずと雖も空気は唯水平に動くのみならず

又上下に動くことあり通常其地表面に於けるものを風と称し其他は之を氣流と称す風とは其方向と力即ち速度を合意し風の吹き来る方位は羅針盤に示すが如く四方位、八方位、若くは十六方位を用ゆ即ち北風とは北方より南方に向ひ北西風とは北西方より南東方に向ふを云ふ又風の力は通常尺度を以て表し時としては圧力を用ゆることあり例へば風速度一秒時間に二十<sup>メートル</sup>米。ありと言へば羽毛の如き軽き物体の一秒時間に二十米（十一間）を飛散すべき速力を示すものにして之を圧力に改算せば一米平方に五十一<sup>キログラム</sup> 疋 即ち我一間平方に四十三貫三百匁あるが如し語を更へて之を言へば汽車の一時間に四十四<sup>マイル</sup>哩を疾走するの速度に等しとす

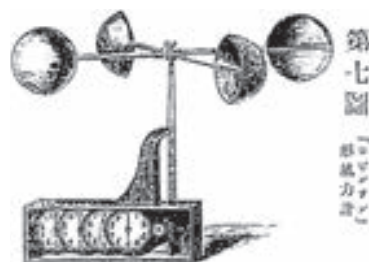
此速度は普通六階級に區別す其階級、速度、圧力は左表の如し

階級	名称	速度 (一秒時「米」)	同 (一時間「里」)	圧力 (一平方米「疋」)	同 (一平方尺「貫」)	説明
〇	静穏	〇	〇	〇	〇	烟全く直上す
一	軟風	一	〇・九	〇・一	〇・〇	風の感覚を起す
二	和風	三	二・七	〇・三	〇・一	樹葉を動かす
三	疾風	六	五・四	三・三	〇・一	小枝を動かす
四	強風	一〇	九・二	一二・八	〇・三	勁枝を動かす
五	烈風	一五	一三・七	二八・二	〇・七	大樹を動かす
六	颱風	三〇	二七・五	一一五・五	二・〇	樹を抜き家を倒す

今此速度或は圧力を測るに用ゆる器械種々あれども最も簡便にして普通用ゆるは「ロビシオン」形風力計とす此器の構造は第七図に示す如く十字桿の各端に四箇の碗形を附着した碗面に受くる風力によりて廻転せしめ其廻転数を以て速度を計算するものなり其計算は下部に分度円の設あり分度円は通常四個を備へ其第一円は一廻転にて百<sup>メートル</sup>「米」あるを示し其之を十分して一分は即ち十「米」あるを示す第二は一廻転にて百米の十倍即ち十<sup>キロメートル</sup>「秆」を示し第三円は百秆第四は千秆を示し各螺旋によりて第一の一廻転を終らは第二の一分転を示し第二の一廻転は第三の一分転とかく順次其廻転数を知り得るなり今此風力計を以て某時間の速度を測らんと欲せば其時刻の前後に於て各分度円の示せる指針を読み取り前後差引すれば之れ其時間に吹きたる風の速度なり

風の観測は屢々困難を感じる所にして風力計に示すものは大氣の最下層部なれば地勢の状況に因りて障碍せらるゝことあり是を以て風力は地面よりも高所に陸地よりも海面に強きは明かなる事実なり従来観測の結果によれば風速度の変化は気温に於けるか如く一日中及一年中に定規の変化あり通常陸地に於ては昼間に大にして夜間に小なり即ち日出より漸次増加し午後二時前後に最強となり夫より次第に減少し夜に入りて微弱となり日出前に至って最弱に達す此変化は高さを増すに従ひ稍々異なることあり富士山頂の観測によれば最強は昼間にあらずして夜半後に起り最弱は午前十時頃に在り斯の如く地面と高所とに其速度を等ふせざるものは何によりて然るか之れ疑ひもなく空氣の受熱に歸す蓋し地面の熱を受くるや之に接する空氣は輕浮となりて上昇し上層のものは緻密なるか為め之に代りて下降す然るに上層の空氣は障害なき為め流動速かなり、かく速かなる上層の空氣下降し其強さを地上に伝へ以て地面上の速度を增高せしむるなり然れども上層に在りては昼間上昇する下層氣流の為め反撥せらるるを以て大に其速度を減し、かくは上下層に反対の結果を來すによるなるへし此状況を大氣の対流運動と稱す

右の変化は高さによりて同しからず又地勢の状況によりて異なるは明かなる事実なれども概ね陸地に大にして海上に小なり其然る所以は又受熱の差に関するものにして陸地は熱を受くること海水よりも早きが故なり彼の海浜に昼夜反対の風を起し夏冬に其方向を変転するか如きは此作用に原くものにして其



関係更に複雑なりとす

中川源三郎『天気予報論』が記述している「風速の六階級」は、見らるごとく「階級〇／静穏／速度〇／圧力〇／説明＝烟全く直上す」を計算に入れていないから六階級に分類されただけで、もしもこれを計算に入れてかぞえるならば、当然、七階級に分類されたはずである。前掲の東京堂版『増補・気象の事典』が「昔はこれと別に陸上用として七段階の風力階級があったが現在は使用されていない」と言及している七階級とは、当然、「〇／静穏（平隠）」を計算に入れた等級＝目盛 scale を採択したのである。そして、わが「若き牧口」の場合は、あくまで中川原著に準拠しつつ自分の頭で考え直して「風は先づ其速度によりて左の七種に区別せらる」とテーゼ化してみせた。テキストを丸写しにせず、必ずいつた<sup>まるうつ</sup>んは自己の思考＝論理の枠組みを通過させて認識＝記述した学問成果だった、と言い直してもよい。それだからこそ、現代に及んでも、記述せられた論題の中身が依然として客観的価値を失わずに済むのだし、最小限《史料》としての使用価値を保持しつづけることも可能なのである。

## 52 雪ふれば冬こもりせる草も木も／春にしられぬ花ぞ咲きける／紀貫之（七九ページ、注6）

この和歌一首は、『古今和歌集』巻第六冬歌に収められている。国歌大観番号三二三である。古典和歌は、写本の系統や伝承事情によって、言葉遣い（言い廻し）が異なったり、漢字表記や仮名表記に相違を生じたりするものであるけれど、たまたま、現行の小学館版「日本古典文学全集」第七巻『古今和歌集』（一九七一年四月刊）が牧口引用エディションと同一の校本を使用していることを知ったので、以下、それに従う。

323 一→九一。二 中世の『古今訓点抄』は「冬ごもり」と濁音にする。三 花が咲いたなあ。「ぞ」は「春に知られぬ花」という作者の思いつきを強調している。「ける」は詠嘆。

冬の歌とてよめる

きの づらゆき  
紀 貫之

323 雪ふれば冬こもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける

〔六帖一〕

——これに対する注釈者（小沢正夫博士）の現代語訳と鑑賞評価の文章とを示すが、小学館版原本では、もと三段組の最下段に置かれてあったことをお断わりしておかなければならない。

冬の歌として詠んだ歌

紀 貫之

323 雪が降って一面の銀世界になった。寒さのために冬眠をしている草も木も、春には見ることできない花を咲かせている。

枝や葉に積もった雪を花に見立てたもの。「春に知られぬ花」のような一種の矛盾はこの作者の得意とする着想であった。

——小沢正夫注釈は、凡例によると「本書は貞応元年十一月二十日の藤原定家の奥書<sup>おくがき</sup>をもつ高松宮家所蔵の伝二条為世筆本を底本とし、同系統の故池田亀鑑氏蔵桃園文庫本、故西下経一氏蔵初雁文庫本などをもって校訂した。」由<sup>よし</sup>である。これは所謂<sup>いわゆる</sup>《定家本》の系統に属する。

つぎに掲げるのは、同じく《定家本》のうち、前掲貞応元年本に次<sup>つ</sup>ぐ貞応二年本（貞応二年七月二十二日、戸部尚書〔定家〕の奥書がある）を底本とした岩波書店版「日本古典文学大系」第八卷『古今和歌集』（一九五八年三月刊）所録作品である。校注者は佐伯梅友。

冬のうたとてよめる

紀 貫 之

323 雪ふれば冬ごもりせる草も木も 春にしられぬ花ぞさきける

——これに対する佐伯梅友博士の頭注を引く。（当然ながら、岩波版原本では、もと二段組の上段個処に置かれていた。）

323 雪ふれば一雪が降ったところが。「花ぞさきける」にかかる。○冬ごもりせる一冬ごもりして植物としての営みをやめている。○春にしられぬ花一花は春が咲かせるものであるが、その春に関与されない花、という心持。あずかり知る、世話をする意の「しる」は、かまわないという意に「知らないよ」と今も用いる、それである。「花」は、葉や枝につもった雪を見立てたものであることは、言うまでもない。

ついでに、参考のため、同じ岩波書店版の「新日本古典文学大系」第五卷『古今和歌集』（一九八九年二月刊）を引いておく。校注者は小島憲之・新井栄蔵。

冬の歌<sup>うた</sup>とて、よめる

紀 貫 之

323 雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にし<sup>し</sup>られぬ花ぞさきける

——これに対する脚注（もとは二段組の下段に置かれている）をも引いておく。

323 雪が降るので冬籠（ごも）りしている草にも木にも、春に知られない花が咲くことだ。○冬ごもり 古くは清音か。○知られぬ 「しる」→一四。▽雪を花に見立てた表現。漢詩や万葉集に例がある。「春にしられぬとは、花は春のものなるに、春にも見えず知られぬ花咲けりと雪をよめる」（教端抄）。花を雪と見立てる表現（→七五）の裏返し。

——あるいは余計な穿鑿<sup>せんさく</sup>だったかも知れないが、`若き牧口、の柔軟且つ鋭敏なる感受性や外界認識力を培養し形成していた有力要素のひとつであった《文学趣味》<sup>アプローチ</sup>に接近<sup>あえ</sup>したいと考え、敢て論及せざるを得なかった。



53 松柏の緑色に映じて其節操を彰はすが如き、或は吾人の貞操義烈の歴史を聯想する機会となる如き、將た又た其潔白にして一点の汚点なき所、其公平にして金殿玉樓も茅屋柴扉も一様に……（七九ページ、注7）

ここの長いセンテンス（百二十字を超えるが、名文であるために少しも長いとは思わない）の意味上の主語 Subject には、雪それ自体を据えるべきか、もしくは、雪の人生（人間生活）に与える影響というものを据えるべきか、そのどちらかである、と解するのが最も合理的であろう。しかし、この部分、表層を読んだのみにては、松柏（広くマツ科植物全般をさしている）と雪との関わりを解きほぐす一種の《文化記号論》的説明記述と受け取って差し支えないようでもある。そして、<sup>しか</sup>然く解読 <sup>ディーコード</sup>decord してみても、必ずしも誤りとは言い切れない。というのは、牧口がここの美文＝名調子を歌い上げたとき、頭の中には志賀重昂『日本風景論』第二章 日本には気候、海流の多変多様な事、の有名な<sup>セクション</sup>節が、通奏底音のごとく絶えず鳴り響みつづけていた、と想像し得られるからである。

## （二）松柏科植物

は國中到る處に之れを看る。蓋し松柏科植物の日本國中到る處に存在する、是れ日本国民の気象を涵養するに足るもの、日本人間々<sup>ま</sup>桜花を以て其の性情を代表せしむ、桜花固より美にして佳、且つ其の早く散る所<sup>うた</sup>転た多情、是れ人に憐まれ惜まるゝ所なるも、忽ちにして爛漫、忽ちにして乱落し、風に抗する能はず雨に耐え得ず、徒らに狼藉して春泥に委する所、寧ろ日本人が性情の標準となすべけんや、松柏科植物は然らず、独り隆冬を経て凋衰せざるのみならず、<sup>しゆくしゆく</sup>轟々たる幹は天を衝き、上に数千鈞の重量ある枝葉を負担しながら、孤高烈風を凌ぎて扶持自ら守り、節操雋邁、庸々たる他植物に超絶するが上に、其の態度を一看せば、幾何学的に加ふるに美術的を調和する所、誰か品望の高雅なるを嘆ぜざらんや。想ふ松柏の<sup>しゆくしゆく</sup>轟々天を衝くは本性たり、而かも根を托するの土壤や少量に、四囲の境遇も亦だ逆ならんか。<sup>たとい</sup>假令其幹をして天を衝かしむ能はざるも、豪氣竟に屈せず、断岸絶壁、石面稜層の上と雖も猶ほ且つ根を硬着し、幹や、枝や、葉や、四時能く風、雨、霜、氷、雪に禦敵し、他の生平艶を競ひ媚を呈せる軟弱の植物は枯死し尽くすも、独り堅執して生存し、会々斧を以て斬伐せられんか、些の未練を遺すなくして昂然斃るゝ所、他の花木の企つ所にあらず、真に日本人の性情中の一標準となすに足れり。

——このあと、志賀重昂の筆は、スウィスの歴史は即ち不羈独立を酷愛する民人の歴史であり而してそのスウィス民人の性情を感化したものこそは松林であった、と記し、ウィルヘルム・テル説話などに言及する。さらに、「独り瑞西人のみならず、古のノルマン民属、今の露西亜人も、亦た松林の下に豪健硬勁なる性情を涵養されきと。松や、松や、何ぞ民人の性情を感化するの偉大なる、特に日本は松柏科植物に富むこと実に全世界中第一、即ち黒松、赤松、五鬚松、リウキウマツ、<sup>テウセンマツ</sup>海松、<sup>イブキ</sup>檜、<sup>ネズ</sup>杜松、<sup>モミ</sup>ハヒネズ、シマムロ、杉、<sup>モミ</sup>アラボウモミ、トバマツ、シラビソ、ハリモミ、トウヒ、エゾマツ、コウヤウサン、<sup>カウヤマキ</sup>金松、<sup>スキシヤウ</sup>水松、イチキ、キヤラボク、落葉松、<sup>マキ</sup>羅漢松、<sup>ナギ</sup>竹柏、<sup>イテウ</sup>公孫樹、<sup>アスナロ</sup>羅漢柏、ヒノキ、サハラ、ヒムロ、<sup>コノテガシハ</sup>側柏、イトスギ、ニホヒビバ、ヒヨクヒバ、ゴラウヒバ、オニヒバ、スイリウヒバ、<sup>カヤ</sup>榧、<sup>イヌカヤ</sup>粗榧、寧ろ列挙するに違なからんとす、是れ日本人の性情を感化するに足るもの、何ぞ漫に英吉利人をして其の榧、<sup>カシハ</sup>蘇格蘭人をして其の<sup>スコットランド</sup>山毛櫸、<sup>フナ</sup>仏蘭西人をして其の落葉松、伊太利人、西班牙人をして其の橄欖を誇揚せしめんや。」

とも記し、斯んなにも素晴らしい松柏科植物の種類・分布・生産量において日本列島は《全世界中第一》の豊かさに恵まれた客観的事実をしっかりと見凝めよ、と説得して「是れ日本人の性情を感化するに足るもの」である、との小結論を提起する。この節の最終の一行は「日本は『松国』なるべし、『桜花国』と相待たざるべからず。」という格率 maxim によってめめ括られている。

マツ（松柏科植物）を以て「節操高き精神境涯」のシンボル symbol と解したり「不撓不屈の士気」の記号 sign と解したりする考え方は、もともと、中国古代儒教の自然観に由来するものであった。『論語』子罕・第九に「子曰、歳寒、然後知松柏之後凋也。」と見える。『礼記』に「其在人也、……如松柏之有心也。……故貫四時而不改柯易葉。」と見える。そして、この中国古代宗教文化の象徴や記号が日本古代律令貴族官僚たちによって受容＝学習され、やがて謂うところの《日本の自然観》がつくられてゆくこととなるのである。

しかし、茲は、必要以上にマツ（松柏科植物）に関する記号学的解読に拘泥すべきではない。牧口記述がめざしたのは、あくまでも、雪と人生、との相關関係を自然科学的かつ社会科学的に明らかにしたいとの目標であった。降雪は人類にとって必ずしも有利点を齎さないが、そうかといって、雪を知らない温暖な地帯に居住する住民ならば不利点を知らないかと問えば、却って、答えは否である。降雪という不利な条件あるがゆえに、却って、人類文明は進歩せざるを得なかった。次の段落に到って、牧口は「古代の文明国が悉く降雪地帯にあらざりしに現在の文明国が悉く降雪地帯にあらざるなきを觀れば……」と明記している。結局、牧口がマツ（松柏科植物）を持ち出して美文を列ねたのは、斯かる太い文脈のなかにおいてのみ意味をもつ、ということをし、われわれ読者は見失ってはならないのである。

55 文禄の役（八二ページ、注22） この段落で牧口が特に論及しようとしているのは《雪と戦争》との関係をめぐる問題であるから、殊更に「文禄の役」という術語＝概念の穿鑿にまで深入りしてゆく必要も無いようにおもわれはするけれど、斯かる何気無い言い廻しひとつにも思想家牧口常三郎、の真面目ないし真骨頂を見て取るよすがが得られることを、敢て最初に注意しておきたい。というのは、明治から昭和戦前まで、日本では「文禄の役」とか「慶長の役」とかの呼称よりはむしろもっぱら「朝鮮征伐」といった殺伐なターミノロジーのみを使ってきたなかで、若き牧口、に限っては、左様な無神経な呼び方を抑制したことを重視したいからである。ありていに言えば、戦前では「朝鮮征伐」のほうが普通に用いられていたのである。一例を挙げるならば、三省堂百科辞書編輯部編纂『新修百科辞典』（一九三四年三月、三省堂刊）のとき当時としては極めて学問的良心に貫かれたエンサイクロピーディアを繙いてみても、「ぶんろくけいちょうのえき」の見出し語のもとに「→チョウセンセイバツ」というみよ項、が一行挿まっていることを知らされる。それだけではない。第二次大戦後に刊行され且つ相当に権威を有する辞典と考えられている京都大学文学部東洋史研究室編『改訂増補・東洋史辞典』（一九六七年三月、東京創元社刊）をひらいてみるのに、「ぶんろく・けいちょうのえき 文禄慶長の役→朝鮮征伐」とあり、なお依然として「朝鮮征伐」の見出し語のほうが重要度を持ちつづけ

ているのに出会い、正直にいて、本補注担当者などはひどく驚愕させられてしまった。さすがに同辞典姉妹篇たる京都大学文学部国史研究室編『改訂増補・日本史辞典』（一九六〇年三月、東京創元社刊）のほうでは「文禄慶長の役<sup>ブンロクケイ</sup>」の見出し語で載っており、その内容記述を検討しても「朝鮮出兵」「秀吉の明国征伐の宿志」「文禄の役の遠征軍」という語句は使われているものの、「朝鮮征伐」の用語はどの記述部分にも使われていないので、漸とひと安心の思いを取り戻すことが出来たが……。なにしろ、自分のほうこそ没義道に侵略行為を犯しているというのに相手国をば悪者呼ばわりするなど、物事の道理<sup>ものこと</sup>から言っても、絶対に許されてはならないはずである。日本人は、現在でも、あまりに倫理観を持たなさ過ぎるとおもう。「征伐」の語義を、簡野道明『字源』に依拠して確かめたところ、はっきり、こう見えるではないか。「【征伐】<sup>セイ</sup>は正、伐ちて罪あるものを正す。王者の討伐。論、李氏『天下有<sup>レ</sup>道、則礼楽一<sup>一</sup>、自<sup>二</sup>天子<sup>一</sup>出』＝征討。」秀吉の朝鮮半島出兵も、明治以後の大陸侵攻も、漢和辞典の謂う「征は正、伐ちて罪あるものを正す」意義を全然具現していないのだから、いやしくも「理性の人。であったならば、羞じて「征伐」の語を用いることを拒否せざるを得ないはずである。これら動かし難い学問的真實ないし客観的諸事実を踏まえたうえで、わが「若き牧口。が、明治初年以來の（否、正しくは江戸時代の一部知識人によって伝統的に唱えられてきた一種の文化イデオロギーに他ならないことを見失うべきではないのだが）征韓論に対して不賛成の立場を採りつづけ、且つ朝鮮文化や韓民族を日本に較べて劣等遅滞のものと見做す朝鮮蔑視論に対しても不賛成の立場を採りつづけた、その歴史意識の正しさ、曇りの無さ、高尚さに睦目し敬意を献げざるを得ない。『人生地理学』執筆の時点 der Zeitpunkt に在って、わざわざ細かい神経を使ってまで「朝鮮征伐」の用語を避けるよう思惟し且つ実践した作家が、ほかになんにん存在したであろうか。万朝報執筆スタッフに集まった幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三ら《非戦論者》ないし《侵略戦争反対論者》をべつにすれば、意識して「朝鮮征伐」の語を忌避した知識人は殆ど皆無に近かったと言って言い過ぎではない。愈々<sup>いよいよますます</sup>弥々、牧口常三郎および『人生地理学』の偉大さに触れ、いやでも脱帽せざるを得なくなる。

征は正、伐ちて罪あるものを正す。王者の討伐。論、李氏『天下有<sup>レ</sup>道、則礼楽一<sup>一</sup>、自<sup>二</sup>天子<sup>一</sup>出』＝征討。」秀吉の朝鮮半島出兵も、明治以後の大陸侵攻も、漢和辞典の謂う「征は正、伐ちて罪あるものを正す」意義を全然具現していないのだから、いやしくも「理性の人。であったならば、羞じて「征伐」の語を用いることを拒否せざるを得ないはずである。これら動かし難い学問的真實ないし客観的諸事実を踏まえたうえで、わが「若き牧口。が、明治初年以來の（否、正しくは江戸時代の一部知識人によって伝統的に唱えられてきた一種の文化イデオロギーに他ならないことを見失うべきではないのだが）征韓論に対して不賛成の立場を採りつづけ、且つ朝鮮文化や韓民族を日本に較べて劣等遅滞のものと見做す朝鮮蔑視論に対しても不賛成の立場を採りつづけた、その歴史意識の正しさ、曇りの無さ、高尚さに睦目し敬意を献げざるを得ない。『人生地理学』執筆の時点 der Zeitpunkt に在って、わざわざ細かい神経を使ってまで「朝鮮征伐」の用語を避けるよう思惟し且つ実践した作家が、ほかになんにん存在したであろうか。万朝報執筆スタッフに集まった幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三ら《非戦論者》ないし《侵略戦争反対論者》をべつにすれば、意識して「朝鮮征伐」の語を忌避した知識人は殆ど皆無に近かったと言って言い過ぎではない。愈々<sup>いよいよますます</sup>弥々、牧口常三郎および『人生地理学』の偉大さに触れ、いやでも脱帽せざるを得なくなる。

さて、これだけの前置きの済んだあとは、戦後刊行された世界史辞典のなかで今なお最高水準を保持しつづけているとの世評を有する平凡社版『世界歴史事典8・フテーメト』（一九五六年十月刊）に依拠し、必要事項を確かめておこう。

#### ブンロクケイチョウノエキ 文禄慶長の役

豊臣秀吉の朝鮮出兵によって日本と朝鮮および明との間におこった戦役で、一五九二年（天正二十年・文禄元年、朝鮮宣祖二十五年、明万曆二十年）から九八年（慶長三年）にわたった。日本で「高麗陣」「朝鮮征伐」「朝鮮役」、朝鮮で「壬辰・丁酉倭乱」、中国で「万曆朝鮮役」などとよばれた。

〔戦役の発端〕秀吉は一五八五年（天正十三年）秋、大阪城で宣教師コエリョ Coelho, Gaspar に征明の計画を語ったが、その翌年、九州征伐の準備にともなう、毛利輝元および宗義調に外征計画を通告した。八七年、薩摩に在陣中、義調の使柳川調信らに朝鮮国王入朝の交渉を命じ、帰途箱崎で義調・義智父子を引見して、さらに厳命した。義智は、朝鮮に渡って折衝を重ね、九〇年には通信使が来た。秀吉は、朝鮮の帰服と誤認し、その使に征明の抱負を告げ、国王に嚮導を命じた。義智は朝鮮に「仮道

入明」の意をもって交渉をはじめた。秀吉は「唐入」の準備を進め、諸将の部署を定め、本営を肥前名護屋に置き、九二年の三月一日を出陣の期と決定した。その後、朝鮮との交渉は要領を得ないままで期日を過ぎたので、部署を改定し、総計十五万八千七百人、九軍に編成された諸軍に動員令を下し、逐次渡航させた。

〔文禄役の経過〕 九二年四月十三日、第一軍（小西行長、宗義智）が朝鮮の釜山浦に上陸して戦端が開かれた。第二軍（加藤清正）以下、相ついで渡航し、順次諸都邑を占領し、京城に進撃した。朝鮮では日本の国情に対する判断を誤って、軍備さえ怠っていたので、国都も危くなった。二十九日、宣祖は王妃、王世子璉（光海君）以下を随え難を避けて平壤に向い、五月二日、行長、清正が京城に入った。

国都占領後、日本軍は九軍の編成に応じて八道を分担し、それぞれ各道の「觀察使」と称して巡撫の行動にうつった。宣祖は五月八日に平壤に着いたが、六月八日になって行長の軍が対岸にあらわれ、ついに十一日には寧辺に向った。行長はすでに十五日に平壤を占領して根拠をすえた。咸鏡道に向った清正は会寧に到着し、臨海君・順和君の両王子を捕虜とし、さらに豆満江を渡って兀良哈征伐をおこなった。

宣祖は、平壤滞在中に遼東に使を送って明に援兵を求めたが、みずから遼東に走って内附する「渡遼の計」を決意し、一方国内に対しては「王世子（光海君）分朝」の策を立てた。そこで、宣祖は義州におもむき、光海君は江原道に至り、諸道に檄をとばして討賊興復の義を論じた。この政策は成功して「義兵」の活動により全羅・忠清両道の巡撫は、いちじるしく阻止された。

明では、慎重に朝鮮の事情を確かめたうえで、七月には遼陽副総兵祖承訓に命じて平壤を攻めさせた。これから戦局の中心は日明の交渉に移っていく。ところが祖承訓は大敗して退き、明は宋応昌を経略備倭軍務とし、また沈惟敬を送り、講和交渉に託して情勢を探らせた。十月には提督李如松が任命されて軍を遼東に集中し、九三年（文禄二年正月）、大軍をひきいて不意に平壤をおそい、行長は敗退し、戦局は一大転換を見た。如松は勢いに乗じて京城恢復を目ざしたが碧蹄の戦いに大敗して平壤に退き、やがてふたたび日明の講和交渉が開かれた。

〔慶長役の経過〕 碧蹄の敗戦後、明から和議がおこり、四月には龍山の停戦協定が成立し、五月中旬には宋応昌の使と沈惟敬が行長にともなわれて名護屋にきたので、秀吉は、講和の七条件をこれに交付した。すなわち、（一）明帝の女を日本の后妃として迎える、（二）勘合を復して官船商船を相往来させる、（三）日明両国大臣が誓詞を交換する、（四）朝鮮の京畿・慶尚・全羅・忠清四道を日本に割譲する、（五）朝鮮の王子、大臣を質とする、（六）捕虜の二王子を朝鮮に送還する、（七）朝鮮の大臣に累世日本に背かない旨誓約させることである。秀吉はただちに王子を釈放するとともに、講和使として小西飛騨守（内藤如安）を明に遣わしたが、日明相互の情勢判断に甚だしいくちがいがあったので、行長と沈惟敬は講和の成立を図るため中間にあつてさまざまな奸策を弄した。ついに九四年にいたり第二の条件から思いついて、明に対する秀吉の「降表」を偽作し、封貢をもって万事を解決しようと企てた。

翌年正月、明は秀吉を日本国王に封じ、徳川家康以下の日本の諸将にも官職を受け、詰命を伝達するために、九六年（慶長元年）楊方亨が正使、日本滞在中の沈惟敬が副使となり、一方、朝鮮国王使黃慎らの随行をも求めて、九月一日、伏見城で秀吉に謁して、冊封の事がおわった。ところが秀吉は講和交渉の内情を知り、条件が具備していないのを怒り、数年にわたった和議は決裂した。

秀吉は、再度出兵の準備をととのえ、明年二月を動員の期と定めた。行長、清正はこれに先だつて渡海し、諸軍の部署も予定の二月には定まり、八軍および南鮮諸城の守備隊、総数十四万一千四百九十人、毛利秀元、宇喜多秀家の軍を中心本隊とした。慶尚・全羅道を攻略して忠清道に及び、沿海の要衝に築城して根拠とし、講和条件の不履行を責め、その交渉の保障占領を断行するのを目的としていたので、諸将いづれも一面交戦、一面和議をもって臨んでいる。七月には諸軍がほぼ渡航をおわり、九月には京畿および忠清道に入り、明軍と戦い京城をおびやかしたのち、各道を巡撫して沿海の本拠に退屯した。

明はふたたび朝鮮の求援に応じ、海陸から朝鮮の防衛にあたらせた。清正らの蔚山籠城のごときはその結果である。翌年八月から九月にかけて、經理万世徳が東西両路および水路から蔚山、泗川、順天の清正、島津義弘、行長らの主力を圧迫して来た。各地で対峙し戦闘がおこなわれている際に、八月十八日秀吉が没し、遺命により諸大老が議して講和の交渉をひらき、軍を撤退させ、十二月には戦局がおさ



まった。

〔戦役の意義〕 この戦役は、秀吉が「佳名を三国に顕わす」（朝鮮国王に贈った答書）功名心からおこったもので、国内統一の延長と考えられていた。諸大名の武力を海外に消耗させるためと理解されたこともある。また日明貿易の振興ないしは勘合の復興の意図に出たといわれたのはこじつけの説にすぎない。しかし戦局推移の過程において、秀吉の対外認識が深まり、西国大名や博多、堺の貿易商らの意図をも考慮にいられて、彼の構想も現実処理に傾き、講和条件には領土欲を占領地域に限って、はじめて勘合の復興をとりあげるにいたった。また、秀吉は、対外交渉を通じて、民族独立の意識を発揮しているが、内戦と外征の本質的な相違を見のがしていたため、朝鮮人の民族的な抵抗によってその失敗を決定的にした。

（中村 栄孝）

右の記述に付け加えて特に触れておくべき事柄がある。それは、秀吉の個人的欲望の犠牲<sup>ヴィクティム</sup>に供された対象物が、朝鮮半島の貴賤男女すべての人々であったこと勿論であるが、のみならず、じっさいには人足<sup>にんそく</sup>として徴発を受け無理<sup>むりむり</sup>々々日本から拉致<sup>らちれんこう</sup>連行された日本の民衆も筆舌に尽くしがたい辛酸を嘗め味わった、という重要事項についてである。いま、かりに藤本久志『日本の歴史 15／織田・豊臣政権』（一九七五年三月、小学館刊）を藉<sup>か</sup>りて、この事項の概観を得ておく手段をとると、こういうことになる。――

降倭・逃倭 飢餓と極寒、そして大軍に攻めつづけられる蔚山<sup>うるさん</sup>籠城<sup>ろうじやう</sup>にあって、極限ともいえる状況に追いやられていたのは、人足として日本から徴発されてきた百姓たちであった。城郭の守りを固めるため朝霧をついて山に材木を求めに追いやられ、夕星をいただくころまでも働かされ、怠ければ投獄され、首金をしめられ、焼金<sup>きやうねん</sup>をあてられ、殺されてさらし首にされ、油断すれば敵軍に首をきられる、絶望の日々であった。慶念はそのような百姓たちの惨状にも眼をそそいでいた。

山へ追ひ登せては大材木を取らせ、取りたる木が細ければ、取り直せとて、または追ひやり、取りに上があれば、唐人から首を切られ、思ひの外に死にけり。また、不用なる物あれば、隠れ逃げ走りなどしたる物もありけり。

このような苦境にさらされるかれらにのこされた唯一の活路といえ、この異国に脱走する道しかなかった。こうして、朝鮮側に投降し、あるいは捕えられた人々は、名のある侍から百姓たちにおよび、降倭<sup>かうわ</sup>・逃倭<sup>とうわ</sup>などとよばれたが、その数は「降倭連続<sup>しゆつたい</sup>出来」（『宣祖実録』）と正史も記すほど、日本の敗色が深まるとともに、増加の一途をたどっていった（内藤雋輔氏）。

降倭のある者は、日本の国情を問われて、「国の法令刻急、戦争相尋<sup>あいひつぐ</sup>」といい、「朝鮮はまことに楽国なり、日本はまことに陋邦<sup>ろうほう</sup>なり」と、法令・軍役きびしい日本には帰国の意志もなく朝鮮に永住したいと答えていた（『看羊録』）が、わけても、正史『宣祖実録』の伝える、降倭のひとり福田勘介という侍の供述は注目に値しよう（中村栄孝氏）。侵略末期に近い慶長二年冬のころ、忠清道で朝鮮軍に捕虜となった福田勘介は、みずから加藤清正の軍の侍だと名のって鉄砲の操技をほこり、他の投降した倭将とおなじように朝鮮軍に属して戦いたいと申し出ていた。また、日本軍の行動を語って、

日本軍は全羅道に留まる意志はなく、老少・男女を問わず、歩ける者は擲え去り、歩けぬ者は殺しつくし、朝鮮で擲えた人々は日本に送って農耕につかせ、日本の農民は兵として動員し、しだいに朝鮮を侵犯して、萌<sup>も</sup>に進撃<sup>しんげき</sup>しようとしている。

と、朝鮮民衆に対する殺戮とともに、日本の農村での農耕労働への投入を主目的として、多数の民衆が日本へ強制連行されている事実を明らかにしていた。

侵略下の日本農村に、軍役の重圧と抵抗によって、小農民の離村・没落を中心とする農村荒廃がひろがって、陰陽師狩りというような放浪の祈禱師を労働力としてあつめる苦肉の策までがとられていたことを想起すれば、この供述を虚構だと笑いつてことはできない。日本民衆の軍役（朝鮮）への徴発と、

朝鮮民衆の日本への強制連行とが、一体としておしすすめられているという証言は、豊臣政権の朝鮮侵略が両国の民衆にとって何であったかを、するどく示唆している。

(侵略の果てに 強制連行と鼻塚)

けっきょく、外国に赴いて残虐極まる蛮行を働いて平気であるような支配者は、国内においても、自国の民衆を冷酷に取り扱って平気である殺人鬼に過ぎないのである。現代日本社会では、豊臣秀吉の人気は格段であるごとくだが、その個人的才能や個人的魅力は別として、自分の欲望のためには他人を不幸に陥れて毫も胸痛めること無き斯かる極悪非道な人物を英雄視して礼賛しつづけてよいものかどうか、知識人たるわれわれは、いちどは反省して然るべきだとおもう。こういう侵略者ないし殺人者をば国を挙げて礼賛して憚らない現代日本社会文化こそ、そのままだちに、経済侵略や環境破壊をば世界じゅうの民族や自然に対して犯して毫も恥じること無き劣悪な価値尺度の「鏡」となっていることに、いやしくも「理性の人」たる者は鋭敏に気付くべきである。俊秀なる東洋学者、梶村秀樹の『新書東洋史 10・朝鮮史—その発展—』（一九七七年十月、講談社新書）は、豊臣秀吉の朝鮮侵略を総括して言う。「朝鮮社会の順調な展開を一時大きく攪乱したのが、一五九二年と九七年の二度にわたる豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争であった。この侵略戦争の原因を、秀吉個人の誇大妄想にのみ求めたり、中国への侵入の通路を求めたにすぎないのに朝鮮側が拒んだのをとがめたものとみるのは、皮相なみかたで、天下統一後の内部矛盾である大名の不満を領地の拡大によって解消することを策したものである。つまり、まがうかたなき封建的侵略・膨脹主義の表われで、何ら弁明の余地がない。実際、侵略後に参戦諸大名に朝鮮全土を分割賜給する試案まで準備されていたのである。日本側ではこれを『文禄・慶長の役』という平面的な名でよび、はなはだしくは『朝鮮征伐』などという言葉があるが、朝鮮側には何ら征伐されるような理由はない。朝鮮側で『壬辰（じん）・丁酉（てい）の倭乱』とこれをよぶのはとうぜんである。端午の節句に『加藤清正虎退治』の人形を飾る風習は江戸時代に始まるというが、それは恥ずべき侵略排外主義の民間への普及を物語ることがらである。」（第2章—李氏朝鮮 1—中央集権的封建国家の成立）と。まことに正説ではないか。われわれ自身の引き負うべき課題として、この四百年間に日本人が朝鮮半島に向けておこなった犯罪の軌跡を辿りつつ「謝罪と償い、との方途いかんを考えなければならない、と、改めておもう。

それにつけても、日清戦争のあと、日露開戦の直前という時点 die Zeitpunkt に在って、敢えて「朝鮮征伐」の術語（むしろ標語と呼ぶべきか）を忌避し且つ擯斥した「若き牧口、の識見の高さには、尽熟感服させられる。なんでもない使用語彙ひとつにも、この若き思想家の〈隠された偉大さ〉は確実に象嵌され且つ燦し銀の光を発たずにはいないのである。